

---

# おかなしな家

なお

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

おかなしな家

### 【Nコード】

N0112S

### 【作者名】

なお

### 【あらすじ】

わたし、保育士の本多瑚菜です。延長保育中に園児と一緒にいい異世界に来てしまいました！ どうしよう！ でも、なんだか、この展開……記憶にあるお話に似ているのですけれども。わたし、無事に園児と一緒に保育園に帰れるのでしょうか！？

最新話は13話です。お話をまとめたりなんたりしてしまいました。そうしたらお話がたりなくなってしまうた……！更新がんばります。読んで下さる皆様にはお手数おかけします。

## 01 追いかけて

「せんせー、ボク、もー、はしれないっ」

「だ、ダメだよ！ はるちゃん！ い、今、本当のクマに追いかけてるんだから」

「だって、だって、お腹もすいてるのに無理だよお」

わたしたちは今、とっても危機的な状況にいる。

わたしは本多瑚菜<sup>ほんだこまつ</sup>、二十二歳。しがない保育士、二年目。わたしが手引いて立ち上がるよう促しているのは担任しているクラスの男の子、佐々木春人<sup>ささきはるひと</sup>くん、四歳。あだ名ははるちゃん。

わたしたちは二人でこの薄暗くて不気味な森の中を彷徨っている。この森ときたら、映画監督の某バートンさんが好きそうな雰囲気で、骨だけの鳥とか出てきそう！ って言っている場合じゃないっ！

あれは数時間前のこと。

わたしは延長保育の担当で、最後に残ったはるちゃんと二人でピアノの練習を兼ねつつリトミックをして遊んでいた。本当は夜にピアノを弾くのは騒音になるからだめなんだけど、はるちゃんはリトミックが大好きなのでこっそりでもないけれど、内緒ということにすることにした。はるちゃんは両親が共働きで月曜から土曜まで延長保育を利用しているから、少しだけ不憫に思っている。一緒にいる時は楽しく過ごしてもらいたいしね！

「くまがでるよー！ 逃げてー！」

わたしの奏でる緊迫したピアノの音に合わせてはるちゃんが部屋を走り回る。わたしも楽しくなってきた。ピアノを離れてはるちゃんを追いかける、気分はもちろんくま！ やっぱり一人でやっても楽

しくないもんね。

「きゃー」

「がおー！」

はるちゃんが楽しそうな声を上げて逃げ回るのを追いかける。うん、テンションが上がってきたぞつ。

「うわああ！ せんせー、早すぎ！」

勢い余ってはるちゃんが部屋から飛び出しまった！ やば、先輩にあとで怒られる。

「だめだよ、はるちゃん！ 部屋の外はずるいよー！！」

わたしもはるちゃんを追いかけて部屋の外に出た。はるちゃんを捕獲しなくては！ 廊下は節電のために電気を付けていない。そ、それにして暗くない？ はるちゃんも不安そうにあたりをキョロキョロと見渡している。明らかに雰囲気が違うものね。

そう、この時にはもうわたしたちはよくわからない不思議な森に迷い込んでいたらしい。

「せんせ、ここ、どこ？」

「どこだろ？ 次の生活発表会で使う舞台でも他の先生たちが作っていたのかな？ 壊したら怒られちゃうから戻ろっか？」

「うん……」

いや、ばかな。次の生活発表会なんて十ヶ月くらい先のことだし！ 生活発表会の準備するならまず新年度の準備でしょうが、と自分突っ込んだのはもちろん内緒です。さっきまではしゃいでいた

はるちゃんもこの物々しい雰囲気を察しておとなしく従ってくれました。はるちゃんがそばまで戻ってきます。

「ね、せんせ？　ボクたちどこから来たの？」

「いやいや、はるちゃん、そこから来たばかりでしょ？」

「そこってどこ？ たんぽぽ組にどうやったら戻れるの？」

⌈  
^  
?  
⌋

わたしはさつきぐつたはずの扉があつた場所を振り返つた。でも、それはなかった。

「え！！」

「せんせ、どうやって戻るの？」

「あれー？ 先生たち、生活発表会の準備頑張りすぎちゃってるのかな？ 困ったね。よし！一緒にドア、探そうか」

それが悪かったのだと思います。きっと、その場を動かなければこんな目にはあわなかったでしょう。

しばらく、二人でうろつろつろ辺りを歩き回りましたが……！！！！

$\frac{1}{\sqrt{2}}$  ————

褒めてもらいたい。このプロ魂。内心の動揺を微塵も外側に出すことのないわたしの姿勢を。はるちゃんに動揺を与えないために必死に我慢しました。胸の内の不安を。

「せんせ、もしかして迷子になった？」

「うーん。そうかもしれないねえ。でも、帰らないとね！ 頑張つてドア探そう！」

「でも、おなか減ってきたよ」

「そうだね。延長のおやつ食べ損ねちゃったよね」

「ね！ せんせ、これパンだよー！」

「ちょ、はるちゃん、食べちゃ！」

「おいしー！ あ、あっちにもあるー！ わ、おいしー！」

「だ、だだめだよ！ はるちゃん！ 落ちてるもの拾って食べるなんて汚いよ！」

はるちゃんは落ちているパンきれをパクつと食べると嬉しいそうにはほ笑む。うう、かわいいなあ、はるちゃん。いや、そうではなくて！ 止めなくては！ でも、このパンきれ一定間隔でたくさん落ちているのははるちゃんはそれを辿ってどんどん進んで行ってしまう。わたしは慌ててはるちゃんを追いかけた。

「うわあああああー！！！！」

はるちゃんの絶叫が辺りに響き渡った。はっとしてはるちゃんの元へ駆け寄る。

「ど、どうしたの！」

「く、くまだよおお。こまつせんせ、本物のくまが出たあ！」

「に！ 逃げなきゃ！」

それが本当にくまなのか調べることもせずわたしたちはそこから逃げ出した。

そうして、逃げ回っているわけです。

「こまつせんせ、ボクもー、走れないし、歩きたくないよ」

「でも、はるちゃん、くまが来たら怖いよ。もうちょっと頑張って

あっち行こう？ いいにおいしい？」

「おやつの二オイだ！」

それまで地べたに座って弱音を吐いていたはるちゃんがパツと顔を上げたと思ったら、匂いのする方へ駆けだしてしまった。ちょ、はるちゃん！ 勝手な行動はダメだよー！！

「おい、待て！ そっちは！」

わたしも慌てていたものだから、後ろのくまがそんな言葉を発していたなんてちつとも気付かなかった。

## 02 お菓子の家

「あつ。お菓子のうちだ」

突然、走り出したはるちゃんは、走り出した時と同じように突然止まった。まだ二十二歳だけど、朝から四歳児と全力で過ごしているわたしとしては、はるちゃんのタフさは見習いたいものがある。でも、きつと無理そう。

「こまつせんせ、おうちあったよ。

この屋根チョコだ！ こっちのドアはクッキーだよ。窓はなにこれ？

すごい！！ こんなうち始めて見た！ ほんものかな？ 食べていい？」

はるちゃんは目を輝かせている。わたしに食べていいか聞いたすぐあとに、クッキーらしきものを口に放り投げていた。え、これってやばいでしょ！

「だめだよ、はるちゃん。さつきから良くないものばかり食べてるし、お腹痛くなるよ？」

「でも、せんせ、これ、すごくおいしいよ。食べて？」

クッキーを口元に押し付けるはるちゃんと、その芳しい香りの誘惑に負けてわたしも口にいれる。

「わ、おいし！ はるちゃん、このクッキーすごくおいしいね」

「ね？ おいしいでしょ。ボク、このクッキーすき！ チョコレートも食べたいなあ」



まるで自分を褒められたかのようにはるちゃんは胸を張った。そしてお菓子の家のドアの部分のクッキーを食べてご機嫌になっている。次は屋根の部分のチョコレートを狙っているようだ。

「はるちゃん、壁はカステラだよ！ おいしー！！」

わたしも恐る恐るお菓子の家をつまみ食いする。だってお腹がペコペコだったんだもの。太るかもしれない、でも、後悔はしない！

「こまつせんせ？ チョコレートとって？」

はるちゃんをお願いを叶えるためになんとか屋根のチョコレートを取ろうと手を伸ばしていた時だった。

「ほら。とってあげるよ」

気配もなくわたしの横に長身の男が現れて屋根の部分のチョコレートを割って差し出してきた。

「えっ！！」

わたしは大慌てではるちゃんを抱えて後ずさる。

「ほら、お腹減っていたんでしょう？」

わたしたちにチョコレートを差し出してきたのは黒いローブを身にまとった菖蒲色あやめいろの目をした男だった。髪の色はフードに隠れていてわからない。相手の様子は穏やかで危険さを感じさせないが、菖蒲色の目なんて非現実的過ぎて理解できなかった。

おかしい！　おかしい！！

頭の中でこれは確かに現実だと、目の前のことを認めるよう指示が出ているのに、感情が追いつかない。理解できないものは怖い。ガクガクと震えそうになるのを必死で耐えた。こんな不安をはるちゃんに悟られたくない。

「痛いことも怖いこともしないから、安心して。ね？」

菖蒲色の瞳を細めて男が言う。

「うん。ありがとー！」

わたしが警戒心を剥き出しにしているのに気づくことなく、はるちゃんがわたしの腕を抜け出して、男からチョコレートをもらいうける。

「おいしい？」

「うん。おいしいよ。おにーちゃんありがと。こまつせんせは背がちっちゃいから高いことどかないんだ」

「そうなんだ。中にはミルクでもココアでも、ミカンでもリンゴでもあるよ。入ったら？」

「いいの？　ボク、こまつせんせと二人で迷子なの。お腹減ってたからうれしい！」

「そっか。いいよ、じゃあ、今日泊ってく？」

「でも、ママが心配するよ」

「うーん。明日の朝になってからの方がいいよ。暗い森の中では迷子になるよ」

「そっか、じゃあ、こまつせんせとそーだんね！」

子どもの適応能力の高さには本当に驚く。はるちゃんは日本では

あり得ない菖蒲色の瞳に警戒することなく男と話をつける。そして、いつものかわいらしい笑顔でわたしを振り返った。

「せんせ、お泊りした方がママのところにカえられるって」

「そ、そっか。はるちゃんはおとまりできる？」

「うーん、でもこまつせんせいるから、だいじょぶかな？」

「じゃあ、今日は特別に一緒に寝ようか」

わたしはあり得ないと思いつつ、あの童話を思い出していた。

「今夜、一晚、泊めていただけますか？」

わたしは意を決して菖蒲色の瞳と対峙する。男の言うことは一理あるのだ。暗い森の中では迷子にもなるし、体も疲れていた。

わたしの言葉を聞いて男は小さく息を吐いた。安心しているのだろうか？

「もちろん」

「いや、そうはさせない」

にこりとほほ笑んで言った男の言葉をさえぎるように、近くで別の男の声がした。驚いて声のした方を向くとそこには体格のいい男がいた。白っぽい半そでのシャツに、皮のパンツに膝まであるブーツを履いて、その腰には見慣れない銀色の細長いものを携えていた。それを剣だと認識したのは男が少しずつ近づいてきた時だった。少しだけ落ち着いていた心拍数が一気に急上昇する。

「あんた、誰？ あんたは用ないでしょ」

「いや、オレはその二人に用があるんだ。その二人をお前のようなものに横取りされるわけにはいかない」

「横取りって、僕が何するって言うのさ」

「お前が、人食い魔女だという話は知っている。この森に捨てられた子どもたちをお菓子の家で釣っては食べているのだろう？ その二人を食べるつもりなのはわかっているぞ」

「えええ！ おにーちゃん、ボクたちのこと食べるの」

二人の応酬を聞いていたはるちゃんがぎょっとしてわたしのそばに駆け寄ってきたので、ぎゅっと抱きしめる。やっぱり、あの童話の通りじゃないの。

「ねえ、僕が魔女って……。せめて魔法使いつて言つてよ。それに人間なんて食べないよ。お菓子食べていた方がおいしいでしょ。人間を食べたって魔力が高まるわけでもないのに」

「だが、人食い魔女が存在するのは確かだろう。お前じゃないとは言切れないはずだ」

「僕のこれは慈善活動だよ？ この森で迷ってる子どもたちを助けてるんじゃないか。次の日にはちゃんと家に帰しているよ、僕は。そんなに疑うなら、あんたも泊ってく？ 別に僕は構わないよ」

「そうだな。お前が怪しい行動を取ったらすぐにコレで切り捨ててやる」

体格のいい男が言った後、ほのかに差し込む月明かりを反射して剣がキラんと光る。それを見てはるちゃんが再び怖がっている。

「んー。」

怖がらなくても大丈夫だよ。怖いことはしないって約束する。

僕はヘンゼル・グラーザー、魔法使いだよ」

菖蒲色の瞳の男がわたしに近づくと優しい声色で腕の中のはるちゃんに向かって言う。にっこりとはるちゃんに微笑みかけるとフー

ドを取った。サラッと目を奪う金色の髪が現れる。全くもって人間じゃない。それにヘンゼルって！ 名前が完全にあの童話の主人公の一人の名前じゃないの！ それに、こんな色彩を持っていて人間なんだろう？ ここはどこなの？ 不安がるわたしを余所にはるちゃんはそのキラキラと光る金色の髪に目を奪われている。

「わあ！ おにーちゃんの髪、キンパツだね！ かつこいいなあ」  
「怖がらせて悪かったな」

いつの間にか体格のいい男もそばにやってきていた。その人ははるちゃんの頭を大きな手で撫ぜると気まずそうに笑った。彼の瞳は水色だ。髪は黒っぽい。彼も同じ世界の住人だとは思えない。だって、こんなに外国人風情が漂っているのに話しているのが日本語なのだ。絶対におかしい。

「オレはグレゴール・ヘーゲル。雇われ傭兵だ。」

今はこの森の警備をしているが、道しるべとして落としていたパンキレをどこかの誰かに食われたせいで、道に迷ってしまったんだ。君たちに出会った時は、もしかして道を知っているかもしれないと声をかけようとしたのに、逃げられてしまってたね」

苦笑しながら言うグレゴールをじつと見やる。こちらはあの童話には関係ないのだろうか……。警戒心剥き出しのわたしとは違ってはるちゃんは柔和だ。興味を持ったものにはまっすぐに突き進む。

「おにーさんも迷子？」

「ああ、同じだね」

「ドジな大人だね」。かつこ悪つ。ところで君たちの名前は？」

「えっとね、ボクは佐々木春人だよ。みんな、はるちゃんって呼ぶんだ、こっちはこまつせんせ」

「「コマツセンセ？」」

それまで散々いがみ合っていた、仲良くなれなさそうな二人の聲がばつちりと重なる。二人は顔を見合わせて嫌そうな表情をした。それを見てなんだか、おかしくなったわたしは警戒心を解いてふつと笑いを漏らす。

「わたしは本多瑚菜と言います。はるちゃんの先生をしているんです。先生と言っても、わたしが教えるのは日常生活のあれこれ程度ですけどね」

「せんせはね、ピアノが上手で、絵も上手で、すごいせんせなんだよ！」

「そうか、いい先生についてもらっているじゃないか」

「うん！ あのね、せんせのくまが出るぞはすごいんだよ！ あのね！ あのね！」

「ハルト、ストップ。このままだと朝になっちゃうから続きはまたあと。ほら、うちに泊る約束でしょ？ お菓子の中に入りたくないの？」

「わすれてた！ ボク、お菓子のうちに泊る！ 早く行こうよ、おにーちゃん！」

長くなりそうなのはるちゃんの自慢話をヘンゼルは絶妙なタイミングで切り上げて、家の中に入る様に促した。

### 03 子どもが寝静まったら

はるちゃんを大興奮させたお菓子の家の内側はログハウス風の木造様式だった。そのギャップにはるちゃんはがっかりしたようで案内された客室のベッドにもぐると早々に寝入ってしまった。歯磨きもお着替えもしていないけれど、この不思議な世界に歯ブラシなんてあるのでしょうか？ 客室にベッドは一つしかないのではるちゃんが寝付いたらわたしも横になろうと考える。明日、帰ることができるのかな。みんな、心配してるよね。思考がどんどんマイナスになっていく。だめだだめだ！ 考えても仕方ない。もう寝よう！

気持ちを切り替えてはるちゃんの横に入ろうと思った時だった。小さくドアのきしむ音がしてドアが開いた。ぎよっとしてドアの方を振り返る。そこには少しだけ驚いた顔をした菖蒲色の瞳の男が立っていた。

「あ。起きてた。コマツセンセ、少しお話をしましょー」

ヘンゼルは飄々<sup>ひょうひょう</sup>と言うと、わたしをリビングとしている部屋に連れて行った。はるちゃんが起きて不安な思いをしないか少しだけ気になったけれど、大切な話のような気がしてわたしは彼の後に続いた。リビングにはグレゴールもいて暖炉の前に置いた椅子に座ってくつろいでいた。

「さて。

君たちどこから来たのかな？

コマツセンセに聞くよりもハルトに聞いた方が素直に教えてもらえるのかな」

先ほどまでの飄々な雰囲気はどこへやら、ヘンゼルは懐疑的な目

を向けてくる。彼の奥に座っているグレゴールも鋭い視線を寄こしている。

「素直に言っても信じないだろうけれど、本当のことは言います。

わたしと春人君は日本にある保育園から来たの。お部屋のドアを開けて廊下に出ようとしたらこの森に出ちゃって、すぐに戻ろうとドアを探したけれど見つからなくて、この森を彷徨<sup>さまよ</sup>っていたら、熊に追われて、そうしてこの家にたどり着いたの」

「ふーん」

「疑ってます?」

「いや、あり得る話だろう」

「そうだね」

「そうなんですか!？」

「つまり二人は異世界から来たことでしょ? よくあることじゃないけれど、まあ、前例もあるし。

だから、僕の目くらましの術をかくぐってここまで来ちゃったわけだね。でも、こっちの世界の食べ物を食べたから術の効果は出るはずだし。言葉もわかるようになったでしょ?」

「それってどういう……」

「だから、こっちの食べ物を食べたから、こっちの人間に体が作りかえられたってこと。異世界の人なのに僕らの言葉がわかるのを不思議に思わなかったの?」

「思っていました」

「僕の魔法はこっちの世界の人には効果があるけれど、異世界の人には無効なんだ。僕のうちには目くらましの術をかけているから、君たちがいなかったらこいつは永遠に僕の家は見つけられないの」

ヘンゼルはそう言ってグレゴールを指さす。つまり、わたしとはるちゃんとは異世界の人になってしまったってこと? 食べ物で体を作り変わるってことは、元の世界でものを食べれば元に戻るのかな。



ん？ ちよつと待つて。あの時……

「待つて、ヘンゼル。あなたの家を探す時、確かにわたしは何も食べてなかったから、魔法の効果はなかったかもしれない。でも、春人君は落ちていたパンきれを食べていたから、もうこの世界の体に作りかえられてたと思うの。それに、わたしは春人君を追いかけてここまで来たから、その話はおかしいと思うんだけど」

「え！ そうなの？ それってすごいことじゃん」  
「すごい？」

「そうだよ、コマツセンセ。君は異世界の人だから知らないだろうけど、ヘンゼル・グラーザーって言ったら泣く子も黙る大魔法使いだよ？」

「そうなの！？」

「まあ、そう言うことになっているな。オレの剣の腕にはかなわないだろうが」

「あんななんて指一本で相手できるよ。」

まあ、いいや。

その僕の魔法をかくぐつてここまで来たハルトって何者なわけ！？」

「何者つて……ただの四歳児だよ」

「信じられない。なんの訓練もされていない子が僕の魔法をかくぐるなんて。認めたくないけれど、ハルトの魔力は相当だよ。」

異世界から来たつてんなら、帰す場所もないわけだし手元に置いて弟子にしようかな。最近、西の魔女がやかいだったからな。ハルトを鍛えて一緒に組むのも悪くないかも」

え？ 帰す場所がない？

「そういうことだ。異世界から人が来ることは確かにある。しかし、帰る方法はないと言われている。こちらに永住だ」

わたしの表情を読み取ったグレゴールが言う。

「あー、大丈夫。ハルトと一緒にコマツセンセもここに置いてあげるからさ。よく見たら、コマツセンセって結構かわいいし。僕好みだよ」

「では、オレもしばらくここに滞在するでしょう」

「はあ?!」

「お前が婦女子を適切に扱うかどうかは未だわからないからな。見極める必要がある」

「うわー。そんなこと言って、コマツセンセに一目ぼれしてるんじゃないの」

「お前と違ってオレはそんなに軽薄じゃない」

わたしを置いてけぼりにして二人がいがみ合う。本当にこの二人は気が合わないみたい。

違う。

本当に考えなきゃいけないことは違う。

「ね? 瑚菜」

ヘンゼルが初めてわたしをちゃんとした発音で呼ぶ。それに意識が向いた。菖蒲色の瞳には柔和な光が宿っていた。不意に目頭が痛む。

「考えてもどうしようもないこともあるんだ。僕がなにを言っても無駄だろうけど、これを受け入れて、前を見据えていくしかない。僕の魔法で記憶操作もできるけれど、そんなことはしたくないと思ってる。現実を受け入れるには強さが必要だ。だから強くなって? 春人には僕から言うよ。きっと、あの子は強いから大丈夫だよ」

ここに来てからずっと張りつめていた糸がそつと緩んでいく。ヘンゼルがそつと頭を撫ぜてくれたのと一緒に涙が落ちるのを感じた。

「今日はもう休むんだ。ゆっくり寝ろ。明日、この世界のことを教えてやるからな」

グレゴールにまで柔らかな瞳を向けられる。

その後、なんとか涙を止めたわたしを部屋まで送ってくれたグレゴールは「おやすみ」と頭を撫ぜると隣りの部屋に入ってしまった。

## 04 いろは（前書き）

ずっと会話のターン。台詞が多いです。うーん。

## 04 いろは

思いのほかぐっすり眠って朝日と共に目覚める。それはとても気持ちがいいことだった。隣りで目覚めたはるちゃんもぐずることなく気持ちよさそうだ。

「せんせ、おはよ。お日様出てるね」

「はるちゃん、おはよ。今日はお天気いいみたいだね。嬉しいね」  
「うん。今日は帰れるかな」

「ね。それじゃあ、おにーちゃんたちに会いに行こうか」

「うん。帰り道おしえてもらえるかな」

無邪気に帰宅することを考えているはるちゃんに少しだけ後ろめたい思いを感じたけれど、それを押し込めた。前を向いて行くんだから、はるちゃんに暗い所なんて見せないし、そんな自分が出さない。

「あ。おはよー。よく眠れた？」

リビングに行くついでに二人は起きだして、ヘンゼルは朝食の準備、グレゴールは昨日と同じところに座っていた。昨日は黒っぽい髪だと思ったそれは黒緑くろみどりで、少しだけ緑がかったている。

「おはよう」

ヘンゼルの声にグレゴールもわたしたちの方を見る。あ、瞳の色は水色じゃない。翡翠色ひすいだ。緑がかった。彼も異世界人だったんだなあ。

「おはよー！ いっぱい寝たよー。ボクもう元気！ 今日はがんばってあるくよ」

「そ？ ま、それよりご飯食べないかね」

この大魔法使いに給仕させるなんてさ、滅多にないことだよ。この価値をわかってるのかな」

ぶつぶつ言いながらも給仕を終えたヘンゼルはみんなをダイニングテーブルに呼ぶと、それぞれの席に着かせる。

「こういう配置とか魔力に関係するから気をつけてよね。間違ったところに着かないこと」

さ、食べようか」

言いたいことだけ言うとヘンゼルは食事を始めてしまう。すっごくマイペースだ。

「じゃあ、はるちゃん。いただきますか。ご挨拶してね」

「うん。いただきます」

二人で手を合わせて食事の前に挨拶をする。ヘンゼルはその様子を見て眉を上げた。

「あ、いいね。それ、すごいいいよ。まねしようかな。魔力に有効」「さっきの配置って話だけど、なんだかおまじないみたい。魔法っておまじないにも通じてるの？ 普遍的な自分の能力とは違うの？」

食べながらヘンゼルに問いかける。食事はパンとサラダ、目玉焼きと牛乳だ。質素で素朴だけれど優しい味がした。お菓子より、食事の方がいいな。

「もちろん、呪いの類も魔法の一部だよ。<sup>まじな</sup>

呪いは呪文を使って精霊の力を借りるもの、魔法は自分の魔力を使って精霊を使役して現象を起こすこと。まあ、呪いの呪文もそれを唱える者の魔力によって効果は変わってくる。全然魔力のない人が呪文を唱えても、大した効果は得られないよ。それこそ、祈りみたいなそんな程度。

だから魔法を扱うのであれば魔力はある程いいってわけ」

「魔法を使いまくって魔力が枯渇しちゃうことはないの？」

「枯れて尽きてしまうことはないかな。なくなっても回復するし、魔力は訓練することで増やすことができる。

こういう配置が大事なのは、自分の魔力が回復しやすい位置とかあるんだ。だからこの席の配置や、馬鹿みたいに見えるかもしれないお菓子の家も、僕にとっては魔力の回復に有効なものなんだよ」

「マリヨクってなにー？　せんせたちの話むずかしいよ」

ヘンゼルに魔力について聞いていたらはるちゃんが口をはさむ。

そうだよ。難しいよね。わたしもよくわからないよ。でも、はるちゃんにはヘンゼルをも上回る魔力があるんだよね。

「春人にもあとでじっくり教えてあげるよ」

「あとで？　でもボクたち帰らなきゃいけないから、早くしてね？」

はるちゃん、早く帰りたいんだな。でも、泣かないで偉いな。健気な姿に胸が痛んだ。

「みんな、食べ終わったようだな」

沈んでしまった雰囲気を変えるようにグレゴールが言う。

「では、瑚葉はオレと来い。春人はここでヘンゼルから話を聞くこ

と」

「なんで？ こまつせんせ、どこ行くの？ やだやだ、だめ。一緒に  
じゃなきゃだ！」

「はるちゃん……」

「春人、男でしょー。なにメソメソしてるの？ 恥ずかしいよ。そ  
れにセンセはいなくならないから大丈夫」

泣き出しそうなのはるちゃんに向かってヘンゼルがあっけらかんと  
言う。後ろ髪をひかれる思いだったけれど、グレゴールがそつと促  
すので静かに退席した。

グレゴールに連れられて屋外へ出る。窓からは燦々と朝日が差し  
込んでいたのに、外に出ると、外は木々が鬱蒼と茂っていて薄っす  
らとしか陽が差し込んでいない。どんよりとした雰囲気だった。こ  
れも魔法の力なのだろうか。こんな鬱蒼としていたところにいたら  
気が滅入りそう。お日様の光を浴びたいな。

「春人は今日から魔法の訓練が始まるらしい。ヘンゼルのことだき  
つとうまくやるだろう。その間、瑚菜には生活習慣を教えるという  
ことになった」

「そっか、日本とは違うもんね。よろしくお願いします」

ペコリと頭を下げるとグレゴールは大きく頷いて、わたしを家の  
裏に促した。

「わ。井戸だ」

「ここで生活用水を汲む。この水を飲んだり、食事に使ったり、風  
呂や掃除に使う。使い方はわかるか？」

「うん。大丈夫。きつと掃除については大丈夫だと思うんだ。箒と  
塵取りに雑巾がけだよ。洗濯は？」



「こつちが洗濯場だ」

案内されたのは井戸のそばにある壁のない小屋のようなところにポンプがあった。水が落ちるところには木でできた水を受ける大きな桶みたいなものがある。そこには蛇腹状ひょうこの板が無造作におかれていて、洗濯板だとわかった。

「原始的だね。わかった。で、あっちに干すんだね。了解！  
理解するのとやってみるのは違うと思うけれど」

洗濯物を干す為に物干し竿が置かれている場所が少し離れたところにあった。不思議なことにそこには陽射しが差し込んでいる。そこだけは場違いなくらい暖かく見えた。小さな草花が青々と茂っている。

あ、あそこすごくいい場所だ。

「最初の内は手伝うから大丈夫だ。徐々に慣れるさ」

「問題は料理かな。わからないものがいっぱいありそうだもんなあ。きつとかまどでしょ？」

「そうだな、火加減が難しいだろう。慣れれば大したことはないだろう」

「ああ、食材とかも不安だなー」

「市場にでも連れて行ってやりたいが、ヘンゼル次第だな。そこでいろいろと見ればわかりやすいだろう」

「そうだ冷蔵庫ってあるの？」

「レイゾウコ？ いや、聞いたことないな」

「そっかー。魔法で作れそうなのにな」

「魔法を生活に応用？ そんな話聞いたことがないぞ」

わたしの呟きを拾ったグレゴールは苦笑しながら、わたしを家の

裏口から台所へと案内した。おお、こんな造りになってるんだ。これは勝手口だな。水を汲みやすくていいな。

「だって、魔法が使えたら生活がすごく便利になると思わない？」

「そうだろうが、魔法はもって高尚なものだからな。」

とりあえず、オレが今から昼飯を用意する。手伝ってくれ」

「わかった」

そう言うつと、グレゴールは手際よく調理を開始した。調理をしつつも話は進む。

「ヘンゼルを見てわかる様に、魔法使いや魔女には高飛車な奴が多いからな。市民に呪い一つ与えるのだって随分ともったいぶった上にぼったくりつてくらの金額をせがむんだよ。だから日常生活に魔法を取り入れるなんて、まず無理な話だ」

「そうなんだ。宝の持ち腐れじゃない？　じゃあ魔法は何に使うの？」

「そうだな、戦争や力の誇示に使われてるよ。良心的な者もいるだろうが、魔法が使える者なんて碌でもないヤツばかりさ。」

だから、今はおとなしいヘンゼルがいつ手の平を返すかわからないだろう？」

「でも、グレゴールはこんなところにいていいの？　何か目的があるってこの森にいたんだよね？」

「まあな。オレはこの森のすぐそばにある街の市長に雇われた傭兵なんだ。その街は、農業で栄えていたんだが最近是不作続きだったんだ。だから貧しさゆえに、この森に子どもを捨てる親が増えた。その見回りを頼まれたんだ。」

この森は深い。オレも気をつけてはいたが仲間たちとはぐれた上に、目印を見失った。そうしてこの家に導かれた。これも何かの縁だろう。帰るきっかけができるまではヘンゼルの見張りをしつつ、

ここに居座るつもりさ」

あのヘンゼルがそれを黙認してくれるのだろうか？

「ヘンゼルはどうしてこんな森の中にいるんだろ。一人で寂しくないのかな」

ふと、この異様な森の中に佇む、違和感しか感じないお菓子の家に済む、菖蒲色の男のことが気になってくる。

「さあな。魔法使いの理でもあるんじゃないのか？ ま、ただの変わり者っただけかもしれないが」

## 04 いろは（後書き）

魔法の概念については、わたしの考え付いたことなのでおかしなところがあっても大目に見てもらえるとありがたいです。

グレゴールはパンを作っているらしかった。こちらではこれが主食みたい。パンよりご飯派なんだけれどな……米って作るの大変だもんねえ。仕方ないのかも。そう言えば最近是不作続きなんだっけ。大変だなあ。

「不作が続いてるって言うていたけど、子どもを森に捨てるって本当？」

「本当のことだ」

「そんなこと許されるの？」

「許されるか許されるかで言えばもちろん許されない。だが、生きるか死ぬかに直面した時、子どもを捨てても生きるという選択肢を選ぶ者もいるということだ。生活に苦しむ下層民には度々あることさ。それにこの森は、迷いの森として名を馳せている。子どもを捨てに来るには申し分ないわけだ。」

だが、生きるためとは許されることではない、子どもは未来の担い手だ。それで我々が雇われた。実際にオレたちが子どもを見つけて歩くわけじゃない。オレたちがいるって噂が立てば傭兵を恐れた親が近づかなくなるという計算だ」

話しながらパン生地をこねるグレゴール。パンをこねるのって意外と大変な作業なのに楽そうに見えるのはやはり彼が傭兵と言う体が資本の仕事をしている人だからなのか。

子どもを捨てる……わたしのいた世界にだって姥捨おばすてて山の話や赤ちゃんポスト、それに赤ちゃんを捨てるニュースがあるくらいなのだから子どもを森に捨てるということも現実を生きていくためには仕方のない選択肢なんだろう。もっと福祉が充実しないといけないんだろうな。

「だけど、うーん。」

魔法が自己顕示欲じこけんじよくと戦いのために使われるような世界だもの、そんなところまで政治が追いつかないんだろっな。

「それは確かに功を奏するかもしれないけれど、短期的な見方だね。長期的な政策を行わないとダメだよ。生活苦が続くんじゃ、どんなに子どもが未来を担うと言っても養うことができないよ。不作の原因や、それに負けない品種の改良、生活苦を支える政策は？そこを市長さんがなんとかしないといけないんじゃないのかな」

「ああ、確かにそうだな。お前……意外と聡明なんだな」

「そうかな。聡明じゃなくても思いつくよ、きっと」

「聡明じゃない？」

瑚莱のような若い者が先生をして、春人についているくらいだ。お前たちのいた世界は随分と学が進んでいるんだな」

「んん？ わたしが幼い？ グレゴール、なんだか勘違いしている気がする。そりゃあ、背が小さくて、目が大きいところが幼く見えるってよく言われるけど、ちゃんと成人しているんだだけだな。」

「あー、えっと、グレゴール？ 幼いつて言っただけど、こう見えて二十二歳なの。成人してるんだよ。はるちゃんは四歳で、確かに彼の先生だけど。わたしの仕事は彼に学問を教えるんじゃないって、両親が共働きの子どもを預かって保育することなの。きっとあなたの考えている先生とは違うと思うな」

「……。」

「なに？ 二十二？ 嘘だろう？」

わたしの言葉にグレゴールは目を白黒させている。

「嘘じゃないよ、本当！」

「驚いたな」

グレゴールは未だに信じられないといった表情をしている。そんなに幼く見えるのだろうか。

「そんなに驚くことかな」

「ああ、オレたちは十五歳くらいだと考えていた」

「えええ！ それは若すぎでしょう」

「いや、だが随分と幼い顔立ちをしているだろう？」

嬉しいような嬉しくないような言葉がグレゴールから続く。十五歳って高校生になりたてじゃないの。やっぱり喜べない。それにしても随分幼く見られていたなあ。

「それはそうだけど。グレゴールたちはいくつなの？」

「オレは二十八だ。ヘンゼルのことは知らないがいつもお前くらいだろうな。」

いやでも、大魔法使いと名が知られているくらいだから、実は優に百を超えているかもしれないぞ」

「だーれが百越えてるって？ それに僕のいないところで僕の噂なんてしないでよね。僕のことを気になるなら直接聞けばいいじゃない。」

それから、これあげるね！」

突然、台所にやってきたヘンゼルはわたしにきちんと畳まれた洋服と、茶色い皮でできた編上げのショートブーツを渡してきた。わたし、昨日から着替えてないもんなあ。保育中の格好のままだった。ジーンズにポロシャツ、それからお気に入りのキャラクターのエプロン。エプロンも外さずに寝たくらいだから動転していたんだな。履いていた上靴も泥がついて汚くなっている。

「そんな意味のわからない服装でいられると、招かれざる客が来た時に困るからね。部屋で着替えてきて。」

あ、僕は二十五歳だよ。僕は天才なの！ 百歳なんてならなくても名を轟かすことができるくらいにね。その凶体だけがでかい人とは違って有能なの」

魔術の面においてはね。

って突っ込みを入れなかった自分を褒めてもらいたい。人間関係を円滑にやっていくためには言わなくてもいい言葉は呑み込ままなくちゃ。

「ありがとう、ヘンゼル」

素直にお礼を言うと、ヘンゼルはフンと鼻を鳴らしてそっぽを向く。それでも耳が薄っすらと赤くなっているのを見ると照れているのがわかる。なんだかヘンゼルって甘えるのが苦手な子どものような。ちよつとかわいいな。

「お礼なんていいよ。」

それから、春人のことだけど。意外と頑固でびっくりした。でも、話がついたから安心していいよ」

「はるちゃん、どうしてるの？」

「あー。修行中かな？」

「なんで疑問文？」

「気合入ったみたいで、僕の言いつけたことをささとクリアしてやろっと思ってるみたいだよ。庭で魔術と格闘中」

庭で魔術と格闘中って、魔術の知識のない人間にはとても危険そうなんだけれど呑気<sup>のんき</sup>に言っていていいのだろうか。言っている本人



は欠伸でもしそうな勢いだ。監督してなくていいの？ 大事が起きることはないの？ はるちゃん、大丈夫なの？

「え！ 怪我したりしない？ 危険はないの！？」

「大丈夫じゃない？ 怪我しても治してあげるくらいの優しさは持ち合わせてるよ」

わたしがうるたえながら言ってもヘンゼルは変わらずのんびりしている。なんだか心配するのが間違つてるとでも言いたそうな雰囲気まで出していて、呆れてしまう。

「魔法って便利ね」

少しだけ嫌味っぽく言う。

「使いたくなつた？」

それなのにヘンゼルときたら楽しいものを見つけたみたいに目を輝かせて答えてきた。

「どうだろ……」

「瑚菜になら手取り足取り教えてあげるよ？」

「結構です。ちよつと着替えてくるね！」

うつ、なんだかこの人、面倒くさい。

「あ！ 部屋なんだけど今日から春人と別々ね」

「え？ なんで？」

「春人の魔力の回復具合とか知りたいしね。朝、配置が大事って話したでしょ。これから春人にとって一番いい環境を作っていかなき

やいけないから。

部屋は今朝の部屋の隣りね？ 場所、わかる？」

「うん。大丈夫。じゃ、着替えてくるね」

与えられた部屋で貰った服に着替える。生成りの長そでのシャツに茶色いロングスカート。それに白いエプロン。それにブーツ。サイズは全てしっくりしている。これも魔法なのだろうか。それまで着ていたものはきれいに畳んでベッドサイドのチェストに置いておく。あとできれいに洗濯をしておこう。いつか着る機会があるかもしれない。元の世界に戻ることはできないって言われたけれど、それはわからない。可能性はあるかもしれないもの。

気合を入れ直してふと窓の外見るとはるちゃんがいた。はるちゃんも服を取り換えている。はるちゃんもシャツと茶色いズボンにブーツだ。なんだか色味がなくて苦笑してしまった。この世界のファッションはどうなっているんだろう。もっとわたしの世界に近づけばいいのになあ。生地があつたら作ってもいいんだけど。ちょっとした物なら作れる気がする！ 伊達に生活発表会の衣装作ってませんよ。

はるちゃんは庭先でなにかをしていた。同じ動作を繰り返しているかと思えば見えない何かに驚いて逃げ回ったり、跳び上がって喜んだりしている。あれがヘンゼルの言う修行なのだろうか。はるちゃんが頑張っているならわたしも頑張らなくてはいけない。家事ができるようになれば、はるちゃんの役に立てるし、グレゴールのところに帰ろう！

## 06 ほへと

わたしは気合を入れてグレゴールたちのいる台所に戻った。台所ではグレゴールがかまどに火を入れてすでにパンを焼こうとしているところだった。

「わお。なかなか似合ってるね。今度はもうちょっと色味のある服を用意してあげるよ」

わたしを見てヘンゼルが満足そうに言う。どうやら彼のお眼鏡に適ったらしい。喜ぶべきなのかどうなのか少し複雑だ。

「ありがとう?」

「なんで疑問文なのさ。普通に喜びなよ」

「ありがとう」

不貞腐れる彼に素直にお礼を言う。菖蒲色と言う不思議な瞳の色をしているけれど、ヘンゼルは性格がもっと素直だったなら王子様ともてはやされるような容姿をしているのだ。そんな人に見た目を褒められても素直に喜べないのは私が卑屈なだけなのだろうか。

それはさておき、かまどにパン生地を入れようとしているグレゴールに問いかける。

「もうパンを焼くの?」

「ああ。今、かまどに入れたところだ。十五分後位に中を確認することによつ」

「発酵とかさせないの?」

「発酵?」

「えっと、イースト菌って言うパンをふっくらさせる菌なんだけど。」

うーん、調味料みたいなものを入れて、焼く前に時間を置いたりしないのかなって」

「ああ。そういう粉はある。ただ、この台所のどこにあるかがわからなかったから、今作ったのには入れていな」

「えー！　じゃあ、硬いパンを僕の昼食に出すってわけ！？　サイアク。僕、硬いパンなんてずっと食べてないよ。戦地にいるわけでもないのにさ」

そばにいたヘンゼルが口を尖らせて不満を漏らす。

「じゃあ、食べなきゃいいじゃない。自分で作ったら？」

ヘンゼルの言い方が気に食わなかった。飢えのせいで子どもを森に捨てる親がいるというのに、せっかく作った食べ物に対する態度じゃない。

「あのね、君たちはしがない居候なわけ。衣食住を僕んちで確保するならそれに見合った対価を提供するべきでしょ。それが家事全般なんだとするなら、僕がちよつと口はさんだつていいんじゃないの」「口をはさむのと、不平不満を言うのは違うでしょ」

「なかなか言うじゃない。お子ちゃまのクセに」「お子ちゃまですって！？」

売り言葉に買い言葉だ。わたしも一気に気色ばむ。子ども扱いまでして！

「わたしは二十二歳で、二年前にちゃんと成人したのよ！」

「いや、でも実際本当にオトナなわー？」

「当たり前でしょ！　煙草は吸わないけど、お酒だつて飲めるわよ！　免許だつて持つてるし」

「なんの免許か知らないけど、まだコドモの色してるよ?」

「なんのことよ!」

「そうなのか? 瑚菜のような美しい娘が?」

コドモの色って何のこと? グレゴールまで調理をする手を止めてわたしを見る。二人の視線に言葉を詰まらせた。

「僕がオトナにしてあげよっか」

ヘンゼルの含みを持った言い方になんのか察する。頬が熱を持ったのを感じた。

「赤くなっちゃってかわいいー。やっぱり、瑚菜って僕好みだな」

にやにやと得意気に言うヘンゼルを睨みつけるけれど、そんなものはどこ吹く風と言った様子で彼はわたしを見ていた。

「ところで、ヘンゼル。パンを膨らます粉はここにあるのか?」

何も言えないでいるわたしにグレゴールが助け船を出してくれる。ヘンゼルの視線が反れて、わたしは小さく息をついた。

「あるに決まってるじゃない。上の棚の右側の扉を開けて真ん中の段の手前から二列目の左から三番目だよ」

「ああ、これか。お前の台所は無駄に似たような粉類が多いから下手に動かすのも憚れてな」

「そうした方がいいよ。呪いに使う危ないものもあるから。だから、膨らまし粉を使おうとしなかったのは正解だよ。」

あんた、意外と賢いよね。見直しちゃった。一介の傭兵さんが思慮深過ぎない? ほんっと怪しいよね」

さっきまでわたしをからかってふざけていたヘンゼルはそれを一新してグレゴールに向き合っている。それは少しの鋭さを含んでいて仲良くなる気はないと暗に言っている気がした。

「次からは柔らかいパンを作ってやるさ。昼飯にはうまいスープを付けてやるからおとなしく食べるんだな」

「はいはい。じゃ、僕は春人でも見てこようかな」

グレゴールはうまくヘンゼルをあしらっているように見えた。大人ってああ言うことなのかな。流石だ。

「そうだ！ はるちゃん！ 庭でなんかやってたけどなにしてるの？」

春人と聞いて、庭でとび跳ねたり走り回っていたはるちゃんを思い出す。あれが本当に修行なのだろうか。エア―相撲とかって言われたほうが納得できる気がするんだけど。

「修行だよ。精霊を使役するために呼び出してるんだと思うけど。精霊も一筋縄ではいかないからね。きつと苦戦してるだろうな」

「精霊っていったい何なの？」

「精霊は精霊だよ。物質的な身体はないけど人格化された超自然的存在」

「ちようしぜんてき……存在……？」

「何にでも宿るよ。人工的に作られたものでなければね。木とか草とか、土、その辺の石にだって宿る。湖とか川、あとは海にもいる風とか、雷とか。ただ、火の精霊は原始の炎のところにしか現れないから、使役できるようになるのは一苦労だよ。今、かまどに火をつけたけれど、これはグレゴールがおこした火だから精霊が宿るこ

「とはないんだ」

「へえ。八百万の神みたいなものなのかな」

「やおよろずの神？ なんのこと！？」

わたしの言葉にヘンゼルが目を輝かせる。探究心は人一倍のようだ。さっきまでの人を馬鹿にしたような表情は見る影もなく期待に胸を膨らませてわたしの解答を待っている。

「わたしのいた国には、大きな木とか岩とか、あと自然現象のなかに神々しいモノを感じてそこには神様がいらっしやると感じていたの。八百万って言うのはわたしのいた国の言葉で数が多いことの例えなの。たくさんモノに神様が宿っていてそれを崇拝して敬っていたの」

「なるほどね。崇拝ってことは宗教的な意味合いが強いんだ？」

概念としては精霊と同じだね。まあ、使役しているくらいだから僕らは君たちよりも精霊を身近なモノと捉えているわけだけれど」

「そうだね。ヘンゼルなんて、精霊をこき使ってそうだもんね」

「失礼だな。精霊にだって力があつて、力のある精霊は簡単に使役できないよ。」

まっ、僕に使役できない精霊なんてなかなかないけれどね。

今、春人は精霊に語りかけて呼び出して使役する、その手順を体で覚えている途中だよ。それが完全に身に着けば一瞬で精霊を使役して事象を起こすことができるわけ。一朝一夕ではできないと思うけど」

「わたしには見えてなかったけれど、はるちゃんは精霊を呼びだしてたのかな。何かから逃げだすような仕草とか、驚いたりしてたもの」

「え？ 呼び出してた？ほんとに？」

わたしの呟きにヘンゼルが目丸くする。

「僕、春人に具体的に呼び出す方法とか教えてないんだけど……」  
「え？」

今度はわたしが目を丸くする。じゃあどうやってはるちゃんは精霊を呼び出したというの？

「春人の力……計り知れないね。」

僕はこの世界にいる精霊を使えるようになって言ったただけなんだよね。そうしたら思うように魔法が使えるようになるからって」

弟子としてはるちゃんを迎えた割には教え方が適當すぎると思うのだけれど気のせいなのだろうか。だけれど、はるちゃんには一を教えたら十を身につける魔法の才能を持っているようだ。あの小さい体にこの世界で生きていくための可能性を無限に秘めているのだ。

「はるちゃん、天賦<sup>てんぷ</sup>の才を持ってたんだね」

「そういうことになるね。僕、見てくるね。きつと修行でお腹減ってると思うから、昼食は奮発してやってね」

そう言う<sup>と</sup>とヘンゼルはさっさと出て行ってしまった。なんだか嵐みたいな人だ。

「そういうことなら、昼飯を奮発してやらんな」

「そうだね！ グレゴール！ わたし、お手伝い頑張るね」



## 07 西からくる禍

わたしたちがこの世界に来て多分四ヶ月が過ぎた。月の満ち欠けが魔力回復に大きく関係していることもあって、ヘンゼルは月日の概念をととても大切にしている。だけど、この森には四季がなくていつも適切な温度に保たれている。寒いのが嫌いなヘンゼルが魔法で気温を保っていると自慢気に話しているのを聞いた。季節の周期が同じなのであれば今は夏だ。だけれど、夏っぽいことは何もしていないけれど。

実ははるちゃんとはまた同室になった。いつも一緒に寝ている。そっちの方がはるちゃんの魔力の回復が大きいらしい。安心感があるじゃないかとヘンゼルは言っていた。はるちゃんの安心感だけじゃなくて、わたしも一緒に寝れるのは安心なんだけれど。はるちゃんは寝付く前にどんなことをしたのか話してくれる。いくつかの精霊を使役できるようになったと聞いている。

「こまつせんせ、あのね。今日は風さんがすごかったの。風に飛ばされるかと思つたよ」

「風の精霊とも仲良くなったの？」

「うん。呼んだらいつでも来てくれるよ。呼ぶ？」

「部屋の中ではダメだよ。水の精霊とは仲良くなったんだっけ？」

「うー。水さんはまだなんだ。水さんは雨の日しか仲良くできないから」

「そっかあ。そうだよねえ。井戸の近くにはいないの？」

「あつ！ 井戸の近くで呼んだことなかった！ 明日やってみよう」

「はるちゃんが、水と風の精霊と仲良くなったら洗濯機作れないかなーって思ってるんだけど」

「洗濯機？」

今、わたしは密かにはるちゃんの魔法の力を日常生活に活用できないかと画策中なのだ。風と水を使って洗濯機、それに冷蔵庫。この二つを作れないだろうか。

「ね？　せんせ」

「ん？　どうしたの？」

「なんか嫌な気分だよ。ヘンゼルのところ行ってもいい？」

「急にどうしたの？」

「ぞわぞわするの。良くないことが起きそう」

はるちゃんは大喜びでベッドから出ると部屋を出て行ってしまった。どうしちゃったんだろう？

呆然とはるちゃんの出て行った先を見ていた時だった。

「声を出すな。静かにしろ」

わたしは後ろから聞き覚えのない声の男に拘束されて喉元に刃物を当てられていた。あまりの驚きに息さえも止まった気がした。それなのに心臓は急に動き出してバクバク言っている。胸が一気に苦しくなった。

「いいか、これから家の外に出る」

わたしは小さく頷く。頭を振ることで喉が切られやしないかとすごく不安だった。わたしは後ろの男に促されてベッドから降りる。そして半ば引きずられるように建物の中を移動した。わたしたちの隣の部屋からは物音一つせずグレゴールがどうしているか様子を見うかがえなかった。

通り抜けたリビングは嵐にでもあったかのように散らかっていた。

家の中は不気味なほど静かでわたしたちが歩く音しか聞こえない。ヘンゼルもはるちゃんも無事なんだろうか。グレゴール、強い傭兵だったんじゃないの？ 気づいて。わたしは心の中で必死に助けを求める。わたしなんか連れ出してどうしようって言うの？ 魔法もなにもつかないのに。

なす術もなく家の外に連れ出された時だった。後ろの男もほつとしたの大きく息を吐いた。

「ったく、このか弱い女のせいでヴェルヘルミーナ様が憂鬱の病にかかったなんて信じらんねーな。ちよつと力入れりゃ、腕だつてポツキリだろーによつ」

後ろの男がわたしの腕に手を回して握りしめる。ギリギリと腕を握られ痛みにも歯を食いしばる。どうして突然こんな目に遭わなければいけないの？

「仲間が戻ってきたらお前とアイツ連れてヴェルヘルミーナ様とこに戻るぜ。そうしたら存分に痛めつけてやるぜ。お前みたいな小娘になにができるんだってんだ」

ドンッと背中を押されて地面に倒れこむ。突然のことで受け身を取ることもできなくて苦しさに咳き込んだ。なんとか立ち上がろうとした時、両腕を背後に回され背中で腕を固定される。その後、ロープが何かで硬く固定されてしまった。どうしよう、なんでこんなことになってるの。

「きゃうつ」

動転して倒れこんだままにいたわたしの背中を男が足で蹴りつけてくる。そしてそのまま体重を掛けられる。

「やめて……くるし……」

なんとか声を絞り出して言うのに相手は気にする風もない。

「かわいいー声出してんなよ。んな声出したところで、オレもヴェルヘルミーナ様も騙<sup>だま</sup>されないぜ」

「な……のこ……わか……ない」

「だーれがお前なんかに教えるかよ」

そう言ってお腹を蹴られる。このまま気を失えたらいいのに。みんな、大丈夫かな。はるちゃん……。理不尽な仕打ちに涙がにじんだ。でも、このまま終わるなんて嫌だ。絶対に嫌だ。渾身の力を振り絞って背後にいる男を睨みつける。

その男は見たこともなかった。とは言え、こちらに来てからヘンゼルとグレゴールにしか会っていないのだから当たり前だった。男は初めて会った時のヘンゼルと同じように黒いフードを被っていた。そこからのぞく瞳は朱色の光を不気味に放っている。ヘンゼルの瞳を見たとき以上の気味悪さを感じた。顔色はわからないけれど頬はこけ落ちていて不健康な印象だった。それなのに男の力は一向に緩む気配がなかった。そして、その瞳とわたしの視線が絡まない。どこを見ているのかよくわからなかった。

「だあああー!!」

ひたすらに背後の男を睨みつけていた時だった。よく聞くヘンゼルの苛々した声が辺りに響く。

「まったく、こんな夜中に何なんだよ」

「来たな！ ヘンゼル・グラザー！ 今日こそお前を討つぞ！」

背後の男の足は未だに背中に置かれたままだったため、気色ばんだ男の足に力が入りわたしの背中が踏みつけられる。でも、ようやく来てくれた。これで助けてもらえる！ 視線を向けるとヘンゼルのおそばにははるちゃんもグレゴールもいる。よかった、みんな無事だったんだ。

「お前！ さっさと瑚菜から足どけろよ、苦しそうだろ！ しかも縛りつけやがって！ あんなこと絶対、僕にさせてくれない！」

えっと、純粹に助けに来てくれたと思っていいんだよね。なんか不穩な発言があつたと思うんだけど……？ だけど、背後の男は素直にそれに従つて足を退かす。わたしは安心して息を吐く。

「西の魔女に伝えろつて言つたろ。いくら言い募つたつて僕は力を貸さないつて」

「ヴェルヘルミーナ様が望んでいるのはお前の力じゃないって言うているだろう。ヴェルヘルミーナ様が望んでいるのはお前自身だ！」

「ばつかじやないの！　んなの、それこそホイホイついて行くわけないだろ。だからさっさと瑚菜を解放しろよ」

「ばかめ！ 今日はお前を殺してでも連れて来いと言われているんだ。今日は覚悟しろよ！」

「お前みたいな格下がなにでできるってんだよ！」

「いいか、今日はお前を殺したっていいんだからな！ いけ！」

男がそう言った途端、お菓子さんの家の周りに多い茂っている木々の間からたくさんの黒い影が飛び出してくる。

「ヤ————ツツツ」

その陰に驚いてはるちゃんが大きな声を出してその場にうずくまる。

「春人、風を起こして！ こいつらを吹き飛ばせ」

黒い影を避けながらはるちゃんに向かってヘンゼルが言うけれど、はるちゃんは頭を抱えてうずくまっている。絶対に泣いてる！ はるちゃんがまだ二歳児クラスだった頃に節分行事でやってきた鬼が怖くて泣いた時と同じだ。

はるちゃん！

はるちゃんを助けなきゃ。そう思って朱色の目の男の拘束から逃れようとする。だけれど、彼はわたしを逃す気がないようだ。黒い影にはるちゃんたちを攻撃させて自分は高みの見物を決めている。

「クソ、風船人間か」

グレゴールが毒づく。黒い影は風船人間と言らしい。グレゴールが黒い影を切り倒すたびにバフンツと音が鳴って白い粉が辺りに飛び散る。本物の人間ではないみたいだ。

「僕が風で吹き飛ばすから切りまくっちゃってよね。でも春人のそばにいないと、コイツ使えないから。やられちゃうよ。」

それと、風船人間は魔法弾くから僕は直接攻撃できないんだよね。もー、めんどくさいっ！」

めんどくさいと言いながらもヘンゼルは辺りに散らばる粉を風の魔法で吹き飛ばす。グレゴールと連携しながら風船人間を倒していく。

「ちつ。数が多いな」

「なになに？ もー疲れちゃったわけ」

「お前のようにオレはやわではない」

「けど、息上がってんじゃないのー」

この緊急時にもヘンゼルたちはいつもと変わらない様子で戦っている。なんだか生きている世界が違うと思った。もちろん生まれ育った世界が違うのだから当然なのだけれど、一緒に生活した四ヶ月でそんな風に感じたことはなかったのだ。この世界で生きること、難しくないと思い始めていたところだった。

だけれど、決定的に違う。

「よし、風船人間は倒したな」

グレゴールが剣を鞘に戻す。彼らを襲っていた風船人間はもう見る影がない。辺りは粉のせいで雪が降ったようになっていて、ところどころに黒い塊が落ちていて、風船人間の外側らしい。

「あとはあんただけだよ？ いつもよりは考えたけどやっぱり格下だよ。ぜーんぜんダメ」

こんな風には戦えない。

ヘンゼルがわたしを拘束している男を指さす。ニヤリと悪い笑みを浮かべた後、赤い雨が降った。数秒後、生々しい血の匂いが辺り

を包んで、男がドサツと音を立てて地面に倒れた。

「瑚菜、大丈夫？」

平然と戦うなんてできない。



## 08 秋空とみんなおなじ

西の魔女、ヴェルヘルミーナ・ビシヨフの襲来からまた季節は巡った。暦の上では秋に差し掛かっている。ヘンゼルの魔法で相変わらず森の外は変わらない。

こちらの生活にもすっかり慣れて日常生活をすんなり送ることができるようになった。料理についてもグレゴールからたくさん教わったし、時々ヘンゼルから渡される料理のレシピ、元いた世界の料理をアレンジしてバリエーションが増えた。みんなにおいしいと言われるのがすごく嬉しい。あの憎たらしいことしか言えないヘンゼルが嬉しそうに料理を食べるのを眺めるのが密かな楽しみだ。

はるちゃんはあれ以来めきめきと魔法の腕を上げているらしい。たくさんさんの精霊を使役できるようになったと寝る前に話してくれる。風の精霊と森を抜け出してどこかに行ったりもしていると聞いている。わたしとグレゴールは未だに街に行きたいとヘンゼルにお願いしているところだというのに。

あの日、木々の間や空から飛び出てきた風船人間を前に何もできなかつたことをはるちゃんはとても後悔している。聞いた話によると、動物の腸に魔法の粉を詰めて人型にしたものを風船人間といい、ロボットのようになんか命令を遂行するらしい。力の強い魔法使いや魔女が作ったモノには命令を遂行するための意思も宿るそうだ。あの時、襲ってきた風船人間には意思はなかつたと聞いている。そんな風船人間を前に蹲り泣き出してしまった自分を責め続けているのだ。

だけれど突然あんな目に遭ってなにもできなかつたとしても悔いすることはないと思う。それをはるちゃんに何度も言った。実際、わたしだって目の前で起きていることを現実とも受け取れず見ていることしかできなかった。目の前で起きたことが自分の目の前でたつた今起きていると実感できたのは、ヘンゼルが魔法でわたしを拘束

していた男を切り殺した時だ。

彼の体から噴き出した温かさの残る血がわたしに降りかかった瞬間。

敵を倒した興奮に染まるヘンゼルを仰ぎ見た瞬間。

改めて自分が別の世界に来てしまったということを悟った。それまでわたしの世界はヘンゼルとグレゴールとはるちゃんの四人でとても小さかった。生活習慣や魔法なんかの違いはあったけれど、生きていくための根本が違うことに直面する機会がなかったのだ。あの日の記憶はわたしに強烈な印象を残して時折わたしを苦しめる。悟ったと言っても生まれ育った世界での価値観では生きていけない世界にいる、それを悟っただけだ。受け入れることができたのか聞かれれば、否なのだ。あの時も、そして今も。

「今日の晩御飯もおいしかったー！　ほんと、瑚葉が来てくれて嬉しいな」

「ボクもこまつせんせのごはん好きー！　ママの作るのよりおいしいもん」

「はるちゃん、ほんと？　先生すごく嬉しい」

食事は三食みんなで摂る。話が盛り上がる日もあればそうでない日もある。わたしの料理の出来も少しは関わってくるみたいだけれど、今日の晩御飯にはじゃがいものような根菜をニョッキ風にしたものを出した。元の世界では外食の際に食べていたけれど、実際に作ることにはなかったから試行錯誤だ。でもうまくできたつもりだったからおいしいと喜んでもらえるとても嬉しい。この瞬間だけはあの嫌な記憶をきれいに忘れて笑うことができる。

「そっいえば、僕んちの食材ってどこから来てるか話したことあっ

たっけ？」

ヘンゼルが小首を傾げながら言う。見目のよいヘンゼルだけれど大の男がする仕草ではない。いくら金髪が揺れようが、王子様のよくな美しい顔のつくりをしていようが、気持ち悪い。わたしは眉を寄せて返事がわりに首を横に振る。グレゴールも首を捻っている。はるちゃんに至っては興味がないようでニヨッキをもぐもぐと頬張っている。

「街の契約している店に小さい魔法陣を書いてるんだ。で、あつちからこつちに転送してもらってるの。魔法陣はあつちからこつちに一方通行のみね。受け取る場所はキッチンの各所。いつもちゃんと置いてあるでしょう？」

ヘンゼルが誇らしげに言う。確かに各食材はいつもきちん決められた場所に補充されている。魔法って便利だなあ。

「それでさ、ほら。食材が豊富になれば瑚菜の料理のバリエーションも増えるでしょ？ 一回、街に見に行ってみない？」

「本当！？ 街に行ってみたかったの！ 嬉しい！」

「僕の嫌いな食べ物も瑚菜ならおいしく調理できるかもしれないし」

ヘンゼルの言葉に思わず立ち上がって喜ぶ。

「あー、はいはい、食事中は座ってね。配置が悪くなるから」

ヘンゼルが苦笑しながらわたしを促す。わたしは黙ってそれに従った。

「だから、明日、みんなで街に行こう！」

「やったー！」

もう一度跳び上がって喜ぶわたしを見て、ようやくはるちゃんが関心を示す。

「町にいくの？ ボク、おやつかってもらおうっ！」

「オレもほしい本がある」

「瑚菜のために新しいお店と契約する予定だから楽しみにしてて？」

「瑚菜はよく頑張っているからな、この際だ。ヘンゼルに貢いでもらうといい」

珍しくグレゴールがヘンゼルと一緒にになって言っている。これはとても珍しいことだ。二人ともわたしを認めてくれていると思っ  
ていいのかな。嬉しくて頬が熱くなった。

「うん、やっぱり笑ってほしいよね、瑚菜には」

「え？」

「なんでもないから、気にするな。さ、明日は忙しくなる。今晚中に明日の仕込みをやってしまおう。オレも手伝う」

「あ、うん。ありがとうグレゴール」

あれ？ なんだかはぐらされた？

「言つとくけど、春人は朝の訓練してからだからね？」

「えええ。ボク、強くなったのに。一日休んだって大丈夫だよ」

「いやいや、まだ安定してないよ。ちゃんとやらなきゃ一緒に連れてかないよ」

「だって、ボク、一人で町にいけるもん」

「一緒に行くのと一人で行くのは違うでしょ？」

「ケチだよ、ヘンゼルおにーちゃんって！」

「なんとも言えばー。何を言っただって無駄だよ。訓練は絶対！」

二人の言い合いを聞いているうちに浮かんだ疑問は流れて行ってしまった。

「瑚菜！ 早く来い」

台所の奥からグレゴールの声がする。わたしは言い合いをする二人を残して台所に向かった。よく言い合いをしているけれど、あの二人はこの数ヶ月間ですっかり仲良くなってしまった。魔法を覚えることに貪欲なはるちゃんをヘンゼルはとも気に入っていて、魔法の訓練の時以外も二人はよく一緒にいるのだ。

はるちゃんと離れることは少しだけ寂しいけれど、その間はグレゴールと一緒にいてくれて何かと世話を焼いてくれる。一緒に家事をしたり、この世界のことを教えてもらったたりしてわたしだっていろんなことを学んだ。はるちゃんにとってヘンゼルが師匠なら、わたしの師匠はグレゴールだ。

次の日、街へ行くためにそれぞれがやらなければいけないことを朝の内に済ます。いつも必ず行う午前中の魔法の訓練は絶対に外せないとヘンゼルが言うので、わたしはいつもよりこぎれいな服に着替えてリビングでお茶を飲んで待っていた。

わたしは白いブラウスに紺色のロングスカートだ。上着は何も用意してもらっていなかったから、桃色のショールを羽織るつもりだ。何着か似たような服を貰ったきりわたしのドレスサーの中が増えることはなかったから今日は少しだけ期待していた。それに下着だってきちんとしたいのだ。向かいに座って大きな体のわりに優雅にお茶を飲むグレゴールも今日はきちんとした身なりだ。彼も白いシャ

ツに、ぴったりとした黒いズボン、それに鳶色のロングコートを着ていた。野性的な風貌の彼にとっても似合っている。洗練された王子然しているヘンゼルに目を奪われがちだけれどグレゴールの精悍な顔立ちもとても魅力的な見た目をしているのだ。

「ご、ごめん！ 緊急事態！ 僕と春人は行けなくなった。ちよつとトラブル発生しちゃった」

グレゴールってかっこいいなあと彼を眺めていた時、バタバタとヘンゼルがリビングにやってきた。

「緊急事態って大丈夫なの？」

「うん、たぶんね。春人の魔力が安定してなくてさ。安定すれば大丈夫でしょ」

「わかった。では、オレが瑚菜を連れて街へ行こう」  
「いい？ 絶対に瑚菜に不埒なことにしないでよね！」

えええ。心配するところってそこなの？

「不埒なこととしていいのは僕だけなんだからね」

「お前のような男ではない。思考回路を一緒にするな」

「あつそ！ もういいよ。案内するからこつち来て」

そう言うつと臍を曲げたヘンゼルはわたしたちの先に立ってすたと自分の部屋に向かっていった。部屋の奥にある扉を開ける。そこは小さな衣裳部屋として作られていたようだがいくつかの魔法陣が点在していた。

「街に行ったらマーケットばかり見て歩かないでね？ 噴水広場の端にあるマダム・メラニーの仕立屋に行くこと。そこの店で瑚菜

の服を見て、それからこの魔法陣移してきて。写し方は知ってる？」

ヘンゼルがグレゴールに折りたたんだ紙を渡す。グレゴールがそれを慎重に受け取った。

「紙を広げて指定された場所に置く。それから紙に火をつけられいいな？」

「うん。それでいいよ。よろしくね。支払いは僕の名前出せば大丈夫だから。甲斐性なしって思われても知らないけど」

「まあ、いいだろう。瑚菜の事は任せてくれて問題ない。で、どの魔法陣だ？」

「あー、もう。僕も行きたいのに！ その魔法陣だよ。あんたは魔法陣で移動したことあるの？」

「もちろんあるさ」

「あつそ」

「瑚菜、来い」

魔法陣の中に立ったグレゴールがわたしを呼ぶ。さっきヘンゼルから受け取った紙は、コートの内ポケットに閉まったようだ。わたしもグレゴールに呼ばれるままに魔法陣に立った。すると唐突にグレゴールに抱きしめられる。

「えっ？ え？ どうしたの？」

突然のことに顔に血が上る。困惑しながら腕から逃れようともがく。

「大丈夫だ。初めて魔法陣で移動する時は酔うんだ。経験者にリードしてもらえば酔いも少なく済む」

「あーもう！ それっぽく言っちゃってさ！ 僕が抱きしめたかつ

たのに」

「え？ 本当？ 嘘？」

「本当のことだから安心しろ。よし、行くぞ。目を瞑って」

安心させるようにグレゴールが穏やかな声で言ったのを確認した後、わたしは恐る恐る目を瞑った。

グレゴールが床を蹴って鳴らす。キューンと言うような高音が鳴り響いた後、目を瞑っていても感じられるくらい辺りが真っ白い光につつまれて体に強い力がかかった。わたしを抱く腕に力が籠った。

「さ、街に着いた」

体にかかった強い力でぐったりしたわたしに、なにもなかったような涼しい顔でグレゴールが声をかけてきた。魔法陣で移動する前にグレゴールが初心者には酔うって言うていたけど、こういうことなのかもしれない。

ぐったりとグレゴールの胸に預けていた頭を横にずらして辺りを見回す。彼は着いたと言っていたけれど辺りは木々に囲まれていて街とは言えない。どういふことかと首を傾げる。

「どうかしたか？」

「ここって街ではないよね」

「そうだな。そこに道が見えるだろう？ 街へ続く街道だ。この道は有名な通りだからオレもよく知っているぞ。

きっと普段は目くらましの術でもかけて魔法陣が見つからないようにしているんだろうな」

「そっか。じゃあ、街まで歩こう！」

「ああ」



黙々と歩きながら、久しぶりにヘンゼルの魔法が掛かっていない自然に目を向ける。当たり前前に木々が赤く色づいていることになんだか新鮮さを覚えた。そうか、もう秋なんだなあ。お菓子の子の周りはいつまでも春が続いている。それもこれもヘンゼルの魔力の回復しやすい季節だからだとかなんとか言っていたけれど。魔法使いつてそんなに魔力の回復を気にするものなのかな。ヘンゼルは魔力の回復しやすい季節が極寒だとしても一年中その季節の中で生活するんだらうか？

春でよかった……。しみじみと思ってしまった。

辺りを見回したり、グレゴールととりとめのない話をしながらしばらく歩いて行くと森を抜けることができた。そして、すぐに街が見えてくる。街はまわりをぐるりと堀に囲まれているようだった。

グレゴールに聞くと、他国の兵や魔法使いなどの外敵から街を守るためらしい。傭兵と言う職業の彼が身近にいるくらいだし、人の命を奪うこと。敵ではあったし、あししなければわたしたちの命が奪われていたのかもしれないけれど。に躊躇わない同居人がいるのだから、戦いがあつたり、敵がいるのは珍しいことではないのかもしれない。

うきうきしていた気持ちが一気に萎えていく。自然と口数が減ったがもともとグレゴールも能弁ではないので気にならなかったようだ。

街に入るのには関所のようなものがあるのかと思っていたけれど、特にそういうものはなかった。門の近くに門番がいたけれど特に何も言われなかった。

「外敵がいるのにこんなに簡単に街に入れて大丈夫なの？ 他の街もこんな感じ？」

「いや、他の街には関所があるし、検問されることもある。オレた

ちはヘンゼルの同居人だとわかってるからだろうな。前もって話がいってるんだろ。

それに、ここは天下の大魔法使いヘンゼル・グラザーの御膝下だからな」

「有名なの？」

「ああ。ヘンゼルがこの堀の中を守ってるんだよ」

「どうやって？」

「ここはあいつの生まれ育った街だからな。あいつが大々的に結界を張っている時点で大バカ者じゃない限り下手なまねはしない。それに、この街ではヘンゼル以外は魔法を使えなくなると言われている」

「ヘンゼルってすごいんだね」

「瑚菜も見ただろ？ 指一本で敵を倒す男だ。普段はへらへらしてるがあいつは本物なんだ」

いつも飄々としているヘンゼルヘンゼルの知らない一面を見た気がする。その名前だけで下手なことをさせないなんて、どれだけの力を持っているのだろう。みんなが恐れるほどの力を持っているのに狙う人がいるってどういうことなんだろう。考えているとやつぱり鬱々としてくる。気持ちを切り替えなくては。

「あ！ ここにはグレゴールを雇った人も住んでるの？」

「いや、市長はここにはいない。こっちは森の東側にあたる。市長が住んでいる街は森を挟んで西側にあるんだ。もっと大きくて華やかな街だ。だが、西側は大地が荒れて不作が続いている。昔のような華やかさはなくなっているだろうな。」

前に話しただろ？ 子どもを森に捨てるって。それも西側の話さ。東側はヘンゼルの影響もあって豊かさを保ってる。

だから、マーケットにもうまいモノがそろってるはずだ。実りの季節だしな」

「そうなんだ。」

……今日はヘンゼルのこと見直す機会が多いなあ。今晚はご褒美に奮発しようかな。マーケットでいいものたくさん見つけなきゃ！」

気持ちを切り替えて前を見る。もうすぐマーケットだ。たくさんの市が立っているのがわかる。人もたくさんいる。髪の毛や目の色が多種多様だ。町中が鮮やかに見えた。

マーケットはとても楽しいものだった。色とりどりの野菜や果物、肉に魚介、それにお菓子や軽食を売る屋台もあったし、花屋や雑貨、古布の店もあった。野菜はお願いすれば試食もさせてくれた。玉ねぎのような見た目なのに人参みみたいな味の野菜もあったし、確実に苺なのにバナナの味をしている果物もあった。さすが異世界だなとびつくりした。お菓子は焼き菓子が多かったが飴細工の屋台もところどころにあって、キラキラ光を反射する繊細な作りに目を奪われた。

グレゴールはわたしが足を止めるたびにあれこれと説明してくれる。説明した後には必ずそれを購入しようとするものだから止めるのが大変だった。

「瑚菜？ ああ、きれいな花だな」

なんの気なしに花屋に目を向けているとまたグレゴールが言うてくる。ちよつとだけ落ち着かない。

「うん。あんまり家のそばで見かけないもんね」

苦笑しながら答える。大小様々で多彩な店先を見ていると自分の心まで華やいでくる気がする。

「そうだな、あれと、奥の、それから……その赤いやつを混ぜて束ねてくれ」

グレゴールは止める間もなく店員に声をかける。花束をの花を自分のセンスで選ぶなんて大人だなぁと彼を見やる。あの花束は今晚の食卓に飾ろう。わたしは勝手に決めて独り語つ。

「お待たせいたしました。こちらになります。どうぞ」

花を眺めていたわたしに店員のお姉さんが花束を寄こす。わたしが受け取っていいのかな？ グレゴールの方を見やると大きく頷いている。それを確認してわたしは花を受け取った。

「良く似合っているじゃないか。その赤い花はヒューヴァーと言うんだ。瑚莱に似合っている」

「そうかな。花束なんて持って歩くことないからなんだか恥ずかしいなあ」

彼が花ことばを良く知る一面を持つことを知るのはもっともつと後のことだ。

「さあ。マーケットでも十分に買い込んだし、マダム・メラニーの店に行くでしょう」

「うん！」

マーケットを抜けて噴水広場を目指す。久しぶりに見る色づく木々が町並みを彩っている。白い幹を赤や黄色の葉が彩る。レンガで舗装されている道路にもたくさんの葉っぱが落ちていて、足を進めるたびに枯れ葉がザクザクと鳴り、楽しい気分になってくる。今日

は街に来ることができてよかったと心から思えた。

だけれど、そんな風に思えたのは仕立屋さんの試着室に入るまでだった。

「もういや！ 絶対に街になんて来ない！」

マダム・メラニーのお店から出てしばらくして、わたしは街中でぶつぶつと文句を言い始めていた。マダム・メラニーと試着室に入った後はリアル着せ替えごっこの世界だった。あれやこれやと着せ替えさせられ、これがいいわと頷かれるたびにグレゴールの前に連れていかれてまたあれやこれやと批評される。一通り論評されたらまた試着室に戻ってあれこれと試着。その繰り返しだ。仕舞いにはどこに着ていくのかもわからないのにコルセットにイブニングドレスまで着せられた。マダム・メラニーが納得した頃にはぐったりを通り越してげっそりしてしまった。たくさんの衣類を買い込むことができたけど、また来たいかと聞かれたら絶対に断る。

「そんなこと言うな。どれも似合っていた。特にドレス姿は一際美しかったな。今日は一緒に来て役得だった。魔法陣も設置してきたから新作のドレスが送られてくるかもしれないぞ」

グレゴールが人の悪い笑顔を浮かべながら言う。からかわれているのだろうけれど頬に血が上った。わたしのそう長くない人生の中であんなにドレスシーな服を着たことなんて皆無だ。ううう。露出度で言えば水着の方が高いのにどうしてあんなに恥ずかしかったんだろう？

「あんなドレス着たの初めて」

「そうか。だが、瑚菜はもとより振舞いに品があるからな。ああいった装いにもそんな違和感はなかったぞ？」

「ふ、振舞いに品なんてないよ」

「だが下町の女たちのようにガサツじゃないだろ」

「そうかなあ」

「ああ。瑚菜の手は労働者階級の手じゃないからな」

そう言うつとグレゴールが不意にわたしの花束を持っていない、支えているだけの手を取る。すつと指先に手を滑らせてそつと撫ぜる。あまりにも慣れた仕草に心拍数が上がる。まっすぐな瞳がわたしの瞳を射ぬく。鋭い視線に目をそらせなかった。

彼の手がわたしの手を持ち上げ口元に持つていく。

スローモーションのような動作の途中でわたしは彼の手から自分の手を引いた。それはそんなに強い力で握られていたわけじゃないのに、なぜかこの動作は随分と骨の折れる作業だった。

「さ、日も暮れる。そろそろ帰るとしようか。ヘンゼルの奴がやきもきして待つてるに違いない」

グレゴールは何もなかったようにいつもの淡々とした調子で言う。動揺している自分がおかしいみたいに思えた。

「そうだね。晩御飯がちょっとでも遅れるとうるさいもんね」

「……。そうだな」

そうしてわたしたちはお菓子の家に戻った。

魔法陣での移動に慣れないわたしは往路と同じようにグレゴールに抱きしめられる形で移転した。家に戻ってきてからもぐらぐらする頭の中を落ち着けるためにしばらく彼の腕の中で広い胸に頭を預

ける。

「ちょーっと、いつまでくっついてる気！？　ただいまとか言いなよ！」

ぐらぐらする頭の中にヘンゼルの大きな声が響き渡る。はつきり言って不快だ。あんなにかっこいいのにどうして言動が落ち着かないんだろう。グレゴールの腕の中ではわたしは眉間に皺を寄せる。

「ああ、今帰った」

わーわー喚いているヘンゼルに対してグレゴールが落ち着いてこたえる。そうそう、男はこのくらいじゃダメだよ。グレゴールの落ち着いた声に眉間の皺が解れていく。

「なーんか気に食わない」

臍を曲げたヘンゼルはずかすかとそばに寄ってくるとべりつとわたしたちを引き離す。そしてすかさず強い力でわたしを抱きしめた。

「あー、なんか満たされる」

満たされるのはあなただけでしょ！　意味不明だっ。あまりにも強い力で抱きしめられたせいで体が痛いし、息苦しい。再びわたしの眉間に皺が寄る。

「ちょっ……ヘンゼル、苦しい」

「あ。ごめんね？」

ようやくわたしの状態を察してくれたヘンゼルが腕を緩めてくれ

た。しかし、解放する気はないようだ。

「ところで、はるちゃんは？」

「あー」

緩んだ腕の中で視線を上にあげてヘンゼルを見上げて尋ねると、彼は気まずそうに視線をそらした。近くにはいないようだ。

「どうしたの？」

もう一度強く尋ねる。

「このところずっと春人が頑張ってたの知ってる？」

そんなこと良く知ってる。小さな体で、未知なる世界で、魔法を思い通りに使えるようになるために奮闘しているのだ。きっと、魔法を使って日本に帰るために。

わたしは静かに、だけれど力強く首を縦に振った。

「皮肉な話だけれど、頑張りすぎたせいで春人の魔力が最近不安定だったんだよね。僕も忠告はしていたんだけど、春人のやつ、全然聞かなくてさ。魔力が暴走したっていうか、自分でそうしたっていうか……今は落ち着いて部屋で寝てるよ。魔力が枯渴しちゃってさ」

「春人の魔力はお前を上回るんだろ？　それが枯渴？」

グレゴールが驚いたように言う。

「うーん。慣れないこと、その上すごく無茶なことしたからね。僕もびっくりしたよ。でもアレを形にできるんだからすごいことなん



だけどさ。

とにかく、早いとこ晩御飯作って春人に食べさせて、今日はゆつくり寝ることだね。それでだいぶ回復すると思うな。春人の魔力回復は瑚菜のそばにいるとすごく早くなるから」

「そうなんだ！ わかった。じゃあ、すぐ晩御飯にするね」

追い急ぎで、だけれど、腕に撚りを掛けて晩御飯の支度を済ませた。用意ができて部屋にはるちゃんを起こしに行く。はるちゃんはベッドの中でぐっすりと眠っていた。あどけない寝顔に胸が苦しくなる。

帰りたいよね。いくらわたしと一緒にだってお父さんやお母さんに会えなくて寂しいよね。月曜日から土曜日の朝から晩までの長い時間をいくら保育士と一緒に過ごそうが、彼ら園児にとってわたしたちは先生でしかなくて、どんなに長い時間を離れていようと家族には取ってかわれないことを良く知っている。異世界に来てしまうにしても、お母さんと一緒だったらまだ救われたんだろうな。それか、わたし一人で迷い込むとか。頼みの綱であつたろうわたしは帰る術を持たないわけだし。

ごめんね、はるちゃん。そつと彼の頭をなげた。

「ん。……せんせ？」

何度も頭をなげているとはるちゃんがそつと目を開ける。

「ただいま。よく寝てたね？」

「うん。今日、疲れちゃった」

「そつか、ずつとお昼寝してなかったもんね。はるちゃん、きつとまだ元気の力がおいついてないんだよ、がんばりすぎちゃだめだよ？」

「せんせが帰ってきてくれてよかった」

「帰ってくるに決まってるよ。晩ご飯食べれそう？」

「うん。ボク、いっぱい食べるよ。元気の力いっぱいつけるんだ」

「そっか、偉いね。じゃあ、テーブルのところまで特別に抱っこしてあげようか？」

はるちゃんはお母さんやお父さんに十分に甘えられない分を保育士に求めていた。だから抱っこなんかのスキンシップが大好きだったのだ。こちらに来てからあまり抱きしめてあげていなかったと思い至り、提案する。有無を言わず提案に乗ってくるかと思っただが、はるちゃんはしばし沈黙して何やら思案顔だ。

「はるちゃん？」

「うーん、こまつせんせに抱っこしてもらいたいけど、ボク歩けるから大丈夫」

「はるちゃん、抱っこしないでいいの？」

「だって、ヘンゼルおにーちゃんたちに見られたら恥ずかしいもん」  
「そっか。うん、わかったよ」

はるちゃんの成長に瞠目した。この世界でも成長は彼にたくましい精神力を与えている。わたしも彼に負けない様に頑張ろう。彼がこの世界で心地よく生活できるように支えよう。

その日の晩ご飯はにぎやかなものだった。はるちゃんはわたしの初めての外出に興味津々でどうだったか聞いてくるし、わたしもマーケットで出会った不思議な野菜たちの話をしたかった。グレゴールはなんの意地悪かわからないけれど、仕立屋さんでのわたしの試着の話をしてはヘンゼルを悔しがらせていた。どうやら大変迷惑かつ不名誉なことにヘンゼルはわたしを仕立屋に連れていくのを相当楽しみにしていたようだった。

「あー、もう。僕好みの服を選んであげようと思ったのに！」

「お前のセンスなんか瑚茉に理解してもらえないだろ」

「こまつせんせ、発表会の時みたくお姫さまになつたらいいのに！」

「え？ はるちゃん？」

「だって、お城の人はみーんなお姫さまみたくしてゐるって聞いたよ」  
「誰に聞いたの？」

「僕に決まってるでしょ。あーあ、瑚茉にドレスアップしてもらいたかったなあ」

「ああ、そう言えば、あのイブニングドレスは良く似合っていたな」

グレゴールの言葉にボンッと顔が赤くなる。ヘンゼルがそんなわたしに目ざとく気づく。

「なに？！ なに赤くなってるのさ！」

「ち、違うよ！ 赤くなんてなってるじゃない」

「あの向日葵色のドレスはヘンゼルの髪と似たような色で正直なところ悔しいが良く似合っていたな。瑚茉の黒い髪が良く映えていた」  
「向日葵色？ あ！ それ、僕がマダム・メラニーに頼んだやつだ。なんで僕のいないところで着せちゃうんだろ。」

届いたら絶対に着てもらおうから！」

「こまつせんせ、またお姫さまになるのー？」

「そうだよ！ 僕がドレスをデザインしたんだから、そこら辺の姫君なんかより絶対にかわいくなるよ」

「お姫さまのせんせはすごくかわいいんだよ！」

「そんなの知ってるよ！ 瑚茉はいつだってかわいいでしょ」

「そうだけど、お姫さまのこまつせんせはいつもよりもっともつとかわいいんだってば！」

「わーかってるよ！」

「わかってないよ！ ヘンゼルおにーちゃんなんて鼻血ブーだよ」

「そんなの……望むところだ！」

はるちゃんもヘンゼルも……かわいいの連呼はもうヤメテクダサイ。穴があつたら入りたいとはこういうことを言うのかも。居た堪れなくなってきた。

はるちゃんの言っているお姫様と言うのは以前お楽しみ会でやった職員の劇、シンデレラのことだ。くじ引きで運悪くシンデレラ役が当たってしまったて、子どもたちの前でドレスアップしたことがある。それを思い出してはるちゃんは言っているのだ。

「いつかあのドレスをまた着てもらいたいな」

おろおろしていると穏やかな声でグレゴールが言ってくる。しかも爽やかスマイル付きだ。うつつ、あっちもこっちも居た堪れなくさせるのが好きなようだ。逃げ場がない。

「なに、僕の瑚葉に色仕掛けしてんのさ！」

「ちがうよ！ ボクのこまつせんせだもん。グレゴールおにーちゃんにだってあげないよ！」

「それは瑚葉が決めることだろ。なあ？」

「自分だけいい格好しちゃってさ。下心隠しきれてないっての！」

「そうだよ！ グレゴールおにーちゃんなんて、今日一日せんせのこと独り占めしたクセに！」

「そうだそうだ！」

「ボク、ボク、……すごくさびしかったんだから！」

はるちゃんがバンッとテーブルを叩きながら立ち上がるとわたしのそばに駆け寄ってぎゅっと抱きついてくる。そっか、はるちゃん……寂しかったんだね。街に行つて浮かれててごめんね。わたしもはるちゃんをぎゅっと抱きしめ返す。

「そうだ！　僕だってさびしかった！！」

そうはるちゃんを真似て立ち上がったヘンゼルはグレゴールに阻止されてわたしのところまでは来ることができなかった。本当に彼は大魔法使いなんだろうか。

「せんせ、ボクもうねむくなっちゃった……抱っこお」

「春人、それはずるいだろっ！！」

そう言うとはるちゃんはわたしの腕の中でごしごしと目元をこする。わーわー喚いているヘンゼルはもう無視！

「うん、じゃあ、もう寝ようね。今日のはるちゃんも疲れたんだね。」

「ごめんなさい、グレゴール。晩御飯の片づけをお願いしてもいい？　はるちゃんを寝かしつけてくるね」

「あ、ああ。寝付いたら手伝ってくれ」

「やだやだ、せんせも一緒じゃなきゃだあ。どこにも行かないで？」

「こんな時だけ可愛い子ぶるなよ！」

はるちゃんが眠そうにとろんとなった瞳でわたしを見上げてくる。久しぶりに甘えっ子モードのはるちゃんだ。ここはぐんつと甘やかしてあげなきゃ。

「わかったよ、じゃあ、一緒に寝ようか。」

グレゴール、ごめんなさい。お片付けをお願いします」

わたしはそう言うとグレゴールの返事も待たずにはるちゃんを抱き上げて部屋に向かった。

はるちゃんを今日買ってきたばかりのパジャマに着せ替えてベッドに寝かしつける。

「せんせはねないの？」

「うん？　一緒に寝るよ。せんせもパジャマに着替えるから待ってね」

衝立の奥でわたしも買ってきたばかりのパジャマに着替える。コットン素材のワンピースタイプのパジャマだ。着替え終わってベッドに潜り込む。

「せんせのパジャマかわいいね」

眠る前にはるちゃんはにつこりそう言っただ笑った。

「ありがとう」

あったかい気持ちになってはるちゃんをぎゅうつと抱きしめる。そして、一緒に眠りに落ちた。

こうしてわたしの長い一日がようやく幕を閉じた。

わたしの朝はチュンチュンという鳥の鳴き声で始まる。雀のような泣き声だけれど、見た目は鳩みたいな鳥だ。その鳥の鳴き声で目を覚ましてカーテンの隙間から洩れる光加減で今日の天気の様子をうかがう。燦々と差し込む光から今日もいい天気になりそうだと感じた。そして一緒にベッドにいるはるちゃんの様子を見る。

そこでわたしは違和感を感じた。隣りにいるのはどう考えても四

歳児なんかじゃない！ 体が大きい！ わたしの胸元に顔を寄せてシートから頭のとっぺんだけは出ている。それが黒い色なのを確認して、ヘンゼルやグレゴールじゃないことに胸をなで下ろすけれど、じゃあ誰だと言っの！？ 態勢はそのままに少しずつ慎重に得体のしれない人物と距離を取る。

「んんん、離れちゃダメ」

寝ぼけているのか掠れた低い声で言うのがやけに色っぽい。思わず顔が赤くなる。いやいや、そんな、動揺している場合じゃない。この人は誰？ はるちゃんはどこ？ 慎重に距離を開けていたら、ぱっと手が伸びてわたしのパジャマをつかむ。うつつ、逃げられない！

「どこ行くの？」

静かに慌てていたら声の主が目を覚ましたようで、わたしを見上げてくる。まだはつきりと覚醒していない黒い瞳の視線が痛いほどに向けられる。

「えっと、朝ごはんの準備かな」

なぜかわたしも真面目に答えてしまう。

「ん。ボクも起きる」

そう言って、目の前の男は昨日はるちゃんがわたしの腕の中でしたように目をごしごしとこすった。

「えっと。誰かな？」

「ん？」

「あなたは誰？」

「え？」



## 09 目覚めると

「え？　じゃなくって……あなたは誰？　ここに寝ていた男の子はどこへやったの？」

「こまつせんせ？」

「えっと……？」

「せんせ？　ボクが春人だよ？」

「いやいやいや……」

「ボク、佐々木春人だよ？　どうしたの？」

「誰が騙されるって言うの？　はるちゃんは四歳なの。あなたを見て誰が四歳って言うと思うの？」

「えっ！　ボク、大きいはまだ」

そう言うつと突然目の前の男が跳び上がる。

「やったー！　安定してる！　ヘンゼルー！　ボク、安定してるー！！」

そう言いながら男は部屋を飛び出していった。あれが、本当にはるちゃん？　だって成人男性並みの体つきだったけど、どういうこと？

わたしも彼を追って部屋を飛び出した。

「ねね！　ヘンゼル。ボク、安定してる！　これで一晩持ったよ。完璧じゃない！？」

「いや、中身が四歳児じゃ意味ないでしょ。見た目だけ大きくなっただって意味ないでしょ」

「でも、これは第一歩でしょ。今日からはいろいろ勉強しよーっと。魔法の応用はそれからでもいいよね？　基本ができてからのこの

体型なんだし。　んー、こまつせんせよかボク背が大きくなっちゃったあ」

部屋の中でヘンゼルとあの彼の話声がする。わたしはノックもなしにヘンゼルの部屋のドアを開けた。

「……きゃっつ」

勢いよくドアを開けたまでは良かったが、一瞬の沈黙の後わたしは慌ててドアを閉めた。ドアの向こうのベッドに裸の上半身を起こして気だるげに腰かけるヘンゼルがいたからだ。は、は、裸っ！　うつう、下半身を目撃しなかっただけましなか。

「どうかしたの？」

再びドアが開く。動揺を抑えようとしていたわたしの心拍数がまた上がる。顔を出したのはヘンゼルだった。嫌味な彼はニヤニヤと人の悪い笑みを浮かべている。

「ちよつと！　服着てよ！」

「初心だよねえ、瑚菜ったらさ。ま、そんなところもいいけどね？　ガウン羽織ったから大丈夫だよ」

ガウンってどこの貴族よ！！　そんなわたしの内心を知ろうともしないヘンゼルはドアを大きく開けてわたしに中に入るようにと促す。

中にはご機嫌の自称佐々木春人がいた。青年の。朝からニコニコと笑顔を浮かべて、寝起きとは思えないテンションだ。

「ねえ、本当に彼がはるちゃんなの？」

ヘンゼルにこっそりと問いかける。

「ん？ そうだよ。あれ？ 見てないの？」

「見てないって何を？」

「大きくなるところ」

「見てないよ！ 朝起きたら大きくなってたんだもん」

思わず声が大きくなる。

「ん？ まさかアレと一緒に寝てたの？」

ヘンゼルの声も大きくなる。

「おい！ 春人、そのやり方は卑怯だろう！ 僕がどれだけ我慢してると思ってるのさ！」

そして矛先は自称佐々木春人に向かう。青年の。彼に向かってびつしと指を指すが、ガウン姿だといまいち決まらない。

「え、だって、こまつせんせ寝ちゃうし。ボクも早くに寝て夜中に目が覚めちゃったから、魔法使ってみたの。そうしたら朝までもったんだよ。卑怯って言われても困るもん」

「論点はそこじゃないだろ！ わかってるくせに、しらばっくれるなよ！」

「なんのこと？」

自称佐々木春人は視線を反らす。まるで明後日の方向を見ているようだ。それについてはあまりヘンゼルと議論したくないらしい。

「四歳児には手加減するけど大人にはしないからな！」

「ボクの方が魔力強いのに？」

「あのねー。僕は百戦錬磨なの。応用次第で魔力が強い奴にだって勝てるに決まってるんだろ！」

「ふーん。ボク、野蛮なのって嫌い。こまつせんせもでしょ？」

ヘンゼルと言いつついた自称佐々木春人が言ってくる。もちろん青年の。よくよく彼を見やる。本当にはるちゃんなんだろうか。黒い髪と黒い瞳は変わらない。二重のたれ目ははるちゃんだ。鼻や口元も柔らかな印象ではるちゃんの面影があると言われるとそうかもしれない。でもでも、その身長はヘンゼルヘンゼルよりも大きい。なんだか随分と成長してるなあ。

感慨深く彼を見つめると、はるちゃんは首を傾げる。

「どうしたの？」

「ううん。本当にはるちゃんなのかなあって」

「そうだよ。精霊に頼んで体を二十歳まで大きくさせたの」

「そんなことできるの」

「うん、できた」

笑顔で頷く自称佐々木春人、青年の。体は大きいのに行動は幼い。やっぱり四歳児が魔法で体を大きくしただけなのかもしれない。

「なあーにが『うん、できた』だよ！ 春人が無茶なことするから昨日、瑚菜と街に行けなかったのにさ」

笑顔のはるちゃんとは対照的にヘンゼルは珍しく難しい顔をしている。

「どういうこと？」

「春人は、ずっと大きくなりたかったみたいで、ここ最近の修行は成長を早めることだったんだよ。でも、それが安定しなくてさ」

「昨日は大変だったよね。ボク、大きくなったり小さくなったりぐにゃんぐにゃんしちゃって」

「だから、元の体型を維持できるように僕の魔力を分けてやったの。一日がかりでさ」

「毎晩、せんせが寝てから大きくなっていっしょに寝てただけど安定しなくて、昨日はなんだかちょうしがおかしくなっちゃったの。」

でも今日はできたんだよ！ 今日一日これですごせたらいいんだけどなあ」

「毎晩そんなことしてたの？」

「うん。だって夜って長いでしょ？」

無邪気に言ってくる。中身は四歳児だとしても、見た目が二十歳そこそこの青年とベッドを共にしていていいのだろうか。いや、よくないでしょう！

「はるちゃん、このままその体型でいるつもり？」

「うん。こっちの方がかっこいいし、力もあるもん」

「戻らないの？」

「うーん、魔力がなくなりそうになったら戻るかもしれないけど、ボク大きくなりたかったの」

「そっか」

「だって、ボク大きくなってせんせのこと、守るんだ」

「はるちゃん……」

「ボク、次はせんせのこと守るよ」

「はるちゃん、あの時のこと……」

はるちゃんの強い視線に言葉を失う。それは熱い決意を秘めた瞳

だった。強い光をたたえて彼はわたしを見つめる。

「ね、瑚菜。春人も男なんだよ。まあ、四歳児だから単純明快なこ  
としか考えられないけれど、大切な人を守りたいと思う歴とした男  
なんだ」

押し黙ったわたしに向かって、ヘンゼルが言った。なんだか呆れ  
たような困ったような表情をしている。どこまでも無邪気なはるち  
やんと違って、そんな表情をする彼を大人だと感じた。

「……うん。はるちゃん、ありがとう」

静かに言うとはるちゃんはっこりといつもと変わらない笑みを  
浮かべた。

「よし。んじゃ、朝ごはんにしよう！ 朝から大騒ぎされたせいで  
僕お腹ぺこぺこだよ」

台所に行くとグレゴールがすでに朝食の準備を済ませていた。遅  
くなったわたしに何か言おうとしていたが、後ろにいた大きくなっ  
たはるちゃんをみて彼の目が点になっていた。

驚く彼に朝食を食べながらことの経緯を説明する。食事をしながら  
もグレゴールは関心しきりだった。

「ところで春人はこのままの姿でいくんだよね？」

「うん」

はるちゃんは行儀悪くパンを口にいつぱい頬張ったままこたえる。

ああ、やっぱり子どもだ。

「ヘンゼルにお願いがあるんだけど、余ってる客室の一室をわたし用にしてもいい？」

「うん、もちろん。僕もそれが言いたかったんだよね」

わたしとヘンゼルの会話にはるちゃんがぎよつとした顔をする。そして、慌てて牛乳を飲んで口の中の物を嚥下した。

「なんで！　なんでそんな話になるの！？」

昨晚のようにテーブルを叩いてはるちゃんが叫ぶ。この世の終わりのような顔をしている。

「だって、いい大人の男が恋人でも奥さんでもない人と一緒に部屋で過ごすなんておかしいだろ」

打ちひしがれるはるちゃんに向かって悪びれる様子もなくヘンゼルが言い放つ。

「でもでも、ボクずつとこまつせんせと一緒にいいもん」

「だけど、はるちゃん。やっぱり大人の男の人と一緒に部屋は先生ちよつと困るな。ちよつと恥ずかしいな」

「えええ」

今までだってそれなりに気を使ってきたのに、中身は変わらないとは言え青年と同室になったらもつと気を使うことになるのは確実だ。同じベッドに入るのだって、四歳と二十歳じゃ気の持ちようが違う。

そして、今にも泣きそうな顔になるはるちゃんにグレゴールが追

い打ちを掛けた。

「そうだな。中身が子どものままなら見た目が大人になろうが意味がないぞ。元に戻れ。みつともない」

とどめだったのだろう、はるちゃんの体がたちまち小さくなっていく。

「ボク、せんせのこと守りたかったんだもん」

そしていつもの大きさ戻ったのはるちゃんの目尻からポロつと涙がこぼれる。

「うん」

小さく頷いて、ぼろぼろと涙をこぼすはるちゃんをぎゅうつと抱きしめた。

「ありがとう。先生すごくうれしいよ。でも、はるちゃんのはるちゃんのままでいいんだよ。無理なことしないでいいの。だから、いつものはるちゃんできて？」

大きくない、いつものはるちゃんから先生はいつも元気をもらってるんだよ

「ほんとう？」

「本当だよ。はるちゃんをぎゅって包むとがんばろうって気持ちになるんだよ。それにはるちゃんの笑った顔を見ると元気が出るんだよ。」

だかいつもはるちゃんがいなくなったら、先生、困っちゃうの」「ボク、小さいままでいた方がいいの？」

「うん。このまま自然に成長してほしいな。先生は五歳のはるちゃ



んにも会いたいし、十歳のはるちゃんにも会いたい。

先生をお願い聞いてくれる？」

「……うん」

「自然に任せて大きくなればはるちゃんの中身だって大きくなるからね？」

「うん」

「先生、はるちゃんの気持ちすごくうれしかったよ。ありがとう」  
「ボク、こまつせんせのことだいすき」

はるちゃんが小さな体でぎゅっとわたしにしがみつく。

「うん。ありがとう」

この子は、この世界でこんなにも一生懸命だ。

## 10 禍は西以外からもやってくる

あれ以来、はるちゃんはわたしの前で大きくなることはない。でも隠れてこっそり大きくなっていることを知っている。小さいままでいてほしいと言ったため、わたしの前で大きくなるのを控えているみたいだ。ちょっとだけ申し訳なく思う。でも、ヘンゼルが言うには大人に変身しているのではないはるちゃんの魔法はとつてもすごいことらしい。今までに変身ではなく成長を自在に操れる人はいなかったからしっかり研究するべきだと言う。もしかすると、はるちゃんは魔法の力によって不老不死になってしまったのかもしれないし、成長を操ることで表立ってはわからないリスクを負っているかもしれないし、そういうことも前例がないから何もわからないと言うのだ。そんなことをさせていいのかと保護者的立ち位置にいるわたしとしてはとても重大な関心事項だ。

「だから、リスクを減らす為にも研究は必要でしょ？」

夕飯の準備をするわたしの後ろでヘンゼルが今日も言ってくる。ずっとはるちゃんにつきつきりで魔法の訓練や研究をしていたヘンゼルだが、この頃、午後はいつもわたしに付きまといっている。はるちゃんは大人の姿になった時にあまりにも子どもっぽいということで、「中身を大人にしよう大作戦 命名ははるちゃん」と言うのを決行しているらしく、グレゴールの元、剣術や一般教養の知識を身につけているのだ。だから、ヘンゼルに一人の時間ができたということだ。はるちゃんがグレゴールと過ごしている間に研究でもしていればいいと思うのに、わたし相手におしゃべりに花を咲かせている。

「そうかもしれないけれど、もし命に関わる重大な危険を冒してい

たらどうするの?」

わたしは夕飯の準備をする手を止めることなく、振り返ることもなくヘンゼルに返す。

「どうしようもないね」

「そんな簡単に言うこと?」

「でも、そうでもしなきゃ研究っていうものは進まないでしょ」

淡々とヘンゼルが言い放つ。時々何かの拍子で偏執的になる

わたしにドレスを着せるために脱衣所に忍び込んで着替えの代わりにドレスだけを置いて行ったり、春人とはかりいっしょに寝るのはおかしいと言って寝ているわたしを自分の寝室に運び込んだりする、グレゴールが贈ってくれた髪飾りを絶対につけなようにとそれは酷いやり方で約束させられたりする。けれど、基本的には淡泊な発言が多くてそのギャップに驚かされる。

彼に何も言い返す言葉が見つからずわたしは黙りこむ。

「考えても仕方ないよ。それに春人がなりたいたいと思うのならそれは春人が責任を持つことで、瑚菜が悩むことではない。生きるってそういうことだよ。誰かがやったことの責任をなんで他の誰かが取るの? まー、組織の一部とかならわかるけれどさ」

「うーん。鋭すぎるよ。甘さがないよね、ヘンゼルって。だってはるちゃんはまだ四歳だよ。危ないことだったら教えるべきじゃないのかな?」

「過保護だね。そんなことしてて、手取り足取りなんでも教えてあげてやってあげて、もし瑚菜がいなくなった時、春人はどうするの? なんにもできない男になるよ」

「わたし、そんなにはるちゃんに手を掛けてる?」

「あー、まー、こっちの常識と瑚菜たちの常識は違うからね。でも

こっちの四歳児に比べたら相当甘やかされてるよね」

「……こっちって過酷だもんね」

「そうだよ、もっと自由に色々やらせた方がいいね。誰かに言われたことも印象として残るだろうけれど、自分で体験してみないことにはさ」

「それが命に関わることも？」

「でも命に関わることだなんてわからないじゃん」

結局いつもこの話になるとわたしたちは平行線だ。洋服のセンスや、生活の中で目が行くところは似ていて、盛り上げられるのに、はるちゃんに関わることは別。わたしが可愛いつて言っても、彼は春人が何か企んでるんだって目くじらを立てる。

「どうせ今日も納得してくれないんでしょ？ この話はやめね」

「うつつ」

「唸ってもダメだよ。春人に大きくなるなって瑚茉は言ってるんだし、言っておくけど僕だって率先して大きくなれとは言っていないからね。なってる時は喜んで研究対象にしてるけれどさ。ちゃんと瑚茉の意見を尊重しているからね！僕は。

忠告はしてるんだから、いいじゃん？」

「よくないよ」

「もー。うじうじしないで！」

そうだ！ 明日の午後、一緒に街に行こうよ。きっと外は雪が積もってきれいだよ？ こないだ買った、真冬用のコート着てるところ見たい。絶対可愛いよー」

ヘンゼルがニヤニヤ笑いを浮かべながら妄想にふけっているのが振り返らなくてもわかったわたしは小さくため息をもらした。

あれは先日のことだ。はるちゃんとグレゴールと一緒に勉強を始めるようになってから時間のできたヘンゼルと一緒に街に行こうと

誘ってきた。お出かけできることに喜んだわたしは二つ返事で彼と出かけた。

だが、行く先々でヘンゼルは街の女の子から熱烈な歓迎や、黄色い声援を受けたりしていて、全然楽しめなかった。ヘンゼルを置いて別のお店に移ろうとしても、彼が離してくれないし、そうすると街の女の子たちにジロジロ見られるし本当に居た堪れなかった。ヘンゼルときたら外面が良すぎるのだ。ヘラヘラ笑って優しく対応しているくせに、わたしの扱いは真逆。思い出すと少しだけ気分が悪い。だけれどその後に連れていかれたマダム・メラニーのお店では、彼に全身コーディネートされ、試着した姿を見せたらいつもより糖度五割増しの笑顔で褒められて不覚にも赤面してしまった。さらにあれやこれやと見繕われて、手放して褒められて、少しだけ嬉しくなったのは内緒だ。

今、彼が言っているコートとはその時に買った時のものなのだ。

「ねえねえ、行くでしょ？」

「うーん」

また女の子に集られるヘンゼルを見るのがわかって一緒に一緒に行くのはちょっとだけ躊躇いがある。

「行かないの？」

「だって……」

「ん？」

「街の女の子たちが……」

「ああ！」

わたしの言いたいことを悟ったのか彼が後ろ手両手を鳴らす。

「嫉妬してるんだ！」

彼の言葉に思わず振り返る。突拍子のない思考だけれど、ヘンゼルらしいと言えばヘンゼルらしくて呆れてしまう。

「嬉しいなあ」

「そうじゃないでしょ」

ニコニコと言ひ募ったヘンゼルにすかさず否定の言葉を投げる。

「違うの？」

「違うよ！ どうしてそういう展開になるかなあ」

「だって、女の子に集られる僕を見たくないんでしょ」

「そうだけど、それで嫉妬にはならないよ。勝手に集られていればいいのに離してくれないから嫌なの」

「ふーん。」

なんでデートなのに別行動しなきゃなんないの？」

「えええええ」

さらっと言ったヘンゼルの言葉に一瞬間が開く。何を言っているのか理解するのに時間がかかった。で、デートって！！

「好きな子と一緒に出かけるとだからデートでしょ？」

「いやです！ じゃあ、行きません。明日は街に行きません」

「なんで？ デート嫌なの？」

嫌に決まってるじゃないのー！

そんなのにほいほい付いて行ったら勝手に勘違いされていつの間

にか彼女とかに昇格されて、それでもって、いつの間にか貞操の危機だよ！ そんな展開になること間違いなしじゃん！

無理無理無理。こんな傍若無人な男はダメ！ もっと落ち着いた、グレゴールみたいな大人の優しさと余裕のある人じゃなきゃ！

「いやですー！」

ここははっきり言ってやらないとね。すると、そう言われることが分かっていたかのように大きなリアクションを取ることもなくヘンゼルはふーんと言いながら頷いた。

「そっか、つまんないのー」

簡単に引き下がってくれたことにホッとしつつも、しつこく息巻くことのないヘンゼルに拍子抜けする。

しかし、この話題はそれであっけなく終ったらしく、その後再び持ち出されることはなかった。

そんなわけだったからヘンゼルは街に行くのを諦めたのだとばかり思っていた。あっけなく引き下がったことをおかしいと思わなかったわたしはまだまだ彼をわかってはいなかったようだ。とても残念だけれど。

「え……どうして？」

翌朝、朝食の準備をしようとして台所に行ったわたしは呆然とした。いつも朝になると新鮮な食材で溢れている台所に何も無いのだ。正確に言うとなにもないわけではない。グレゴールお手製の日持ちするパンや調味料の類があるだけで、野菜も卵も肉も魚介もなかった。昨日の残りの野菜だってあるはずなのに、どうして？ と、疑

問が浮かぶ。魔法陣も定期メンテが必要なのかな？

「どうした？」

少し遅れてグレゴールも台所にやってくる。寝起きの彼の声はかすれていてちよつと色つぱい。最近わたしの周りに色気のある男性が多いのは気のせいなのだろうか。色気が必要であろう女子のわたしにはこれっぽちもないというのに。少しだけわけてもらえませんか。

あ、話がそれました。

朝食の準備しなきゃいけないんだった。

「ええと。台所に食べるものがなにもなくなつて」

「なにもない？」

「あ、グレゴールの作ったパンはあるけど、野菜とか、牛乳もないし……紅茶の葉もないよ。コーヒーも。どうしたのかな？」

「どうせヘンゼルの仕業だろ？ 朝食はパンと水だな」

「なにがしたいんだろ……？」

「さあな。まあ、明日には届くだろうから今日はパンで我慢だな」

質素な朝食を食べた後、待ちに待った様子でヘンゼルが口を開いた。

「んー、魔法陣の様子がおかしいのかもしれないね。んじゃ、見に行こうか。もちろん瑚菜も一緒に来てね？ 魔法陣が直せない時は食材買い込んでこないといけないからさ。グレゴールはいつも通り春人のことよろしく」



ヘンゼルの様子を見てようやく大体のことを理解する。一緒に街に行くために一計はかったらしい。につこり笑って機嫌のいいヘンゼルを睨みつけるが彼はちっとも気にしていないようだ。そして、結局食事が終わってから二人で街に行くことになった。

「早いところ行ってきたくれ。こんなんじゃ腹の足しにならないかな。オレは行けないが、うまいものが食えるのを楽しみにしてる」  
「うん。グレゴール、はるちゃんのことよろしくね」

「ああ、心配するな。ここはやっておくから出かける準備をしてくるといい」

「こまつせんせ、おみやげわすれないでね？　ボク、おいしいおやつ食べたーい！」

「わかったよ、はるちゃん。じゃあ、着替えてくるね」

冬の街へ行くなら暖かい服装に着替える必要がある。秋頃から急に増え始めたクローゼットの中をあさった。マダム・メラニーのお店から定期的に服が届くようになってしまったために服がどんどん増えていくのだ。今日はどうしようかな。

「なーに悩んでるの？」

クローゼットに頭を入れて中を物色していると背後からいきなり声がかかり、慌てて頭を出したために髪がぼさぼさになってしまった。

「扇情的過ぎる姿勢だから焦っちゃったよ。僕じゃなかったらやばかったんじゃない？　あー、僕って紳士的！！　髪ぼさぼさだよ？」

ぶつぶつ言いながらヘンゼルがわたしの髪を撫でて整える。こういう時は明後日の方向に自分の思考を飛ばしてさせるがままにしておいた方が早く終わることを確認済みだ。下手に反論したり口を挟むと話が厄介になるのだ。彼が満足したのを見計らってから話しかけるのが一番安全。

「で、どうしたの？」

「遅いからどうしたのかなーと思って。まあ、女性には準備に時間がかかるものだよね」

「う……そんなに待たせた？」

待たせている自覚がなかったために申し訳なくなる。上目づかいでそっとヘンゼルを見やる。彼は厚手の暖かそうなコートに毛皮のマントを羽織っていて、ブーツもいつもより長いものを履いている。コートのポケットからは手袋も顔を出していて、準備万端のようだ。街は冬だけど、この家は春の陽気だからきつと待っている間暑かったんだろうな。

「……じゃあ、僕が選んであげるよ」

そう言うとは今度はヘンゼルがクローゼットに頭を押し込む。これと、これ、いや違うかなどぶつぶつ言っているのが聞こえる。

どっちにしろ時間がかかったのは気のせいなのだろうか。さらには結局いつもと似たような格好になって、昨日言っていた新しいコートを着る。若草色の毛糸で編まれたコートだ。裏地が毛皮だからとっても暖かい。

「うん。その色いいね。珊瑚は目も髪も黒いから着る服の色を選ばないよね」

「そうなの？」

「そうだよ、僕が黄色とかきたら目立ちすぎでしょ？ 髪も金色なのに服まで似たような色でさ、周りの人がちかちかしちゃうと思わない？」

「でも、わたしだって黒に黄色じゃ、目立ちすぎるよ」

「そうかな？ 逆に映えていいんだと思うけど？ 向日葵色のドレスだってすごく似合ってた。あれはやっぱ黒髪に向日葵色が映えるからだよ」

「あまり派手な色は着たことないから恥ずかしいんだけど」

「今度は菖蒲色のドレスにしようね。んで、僕と一緒に街に出かけて、見せつけよ？」

話しながら魔法陣に乗る。魔法陣での移動にも随分慣れてきた。嬉しそうに言いながらぎゅっとヘンゼルが抱きしめてくるが、できれば解放してもらいたい。もう抱きしめられなくなつてちゃんと移動できるのだ。

「も、離して」

「だーめ。ほら、移動する時に舌噛むよ？」

「大丈夫だつてば」

ヘンゼルが解放してくれる前に魔法陣が発動して体に強い力がかかる。話をしていたら本当に舌を噛みそうだ。ここは不服だけれど引き下がるしかないだろう。

「ああ。ほんと瑚茉つてやーらかあい。すっごく満たされる。ずっとくっついていたいよう」

移動が終わつてもなお離れようとしないうヘンゼルをひきはがしてわたしは街へ向かう。

「そういえば、本当に魔法陣の調子が悪くなったわけじゃないですよ」

「げ。ばれてる？」

話を振られたヘンゼルは表情歪めて苦笑いを浮かべる。あはははと乾いた笑いが聞こえるのは気のせいではない。

「あたりまえでしょ！ あんなにたくさんあった食材はどうしたの？」

「目くらましの術だよ。台所にあるよ」

「ええ！ ほ、ほんと？」

「うん。だってもったいないじゃん？」

さっきまで気まずそうにしていたのに、あっけらかに言う彼に對して俄かに怒りがわいてくる。

「もう！ じゃあ、わたし、かえる！」

「えー！」

「目くらましの術といてよ！ そうしたら街に行かなくていいじゃない」

「ええ。やだ。街行きたい！」

「わたしもやだ！」

「僕だってやだ！」

大人げなくわたしたちは街道の真ん中でにらみ合う。なんでこの人はこうも傍若無人なんだろうか。めんどくさい人だ。なんだかすごく彼に従いたくない気分だ！

「なんで僕と街行くの嫌だって言うのさ？」

「だって、ヘンゼルってば女の子に囲まれて愛想振りまいて見るに

見兼ねるって言うか……そうかと思ったら、わたしにはあれ取ってこいとか持てとかって顎で使うからすごく嫌な気分になるの。それにこう言々とヘンゼルは焼きもちやいてって浮かれるし。腹立たしいのよ！」

「わかった。じゃ、顎で使わないし、優しくする！ 絶対に！ だから今日は街に行こう」

「絶対？ 約束破ったら二度目はないからね！」

「もちろん！ 僕は約束したことは守る」

得意気に言う彼に丸めこまれる形で街へ行くことになってしまった。ヘンゼルの言うことなんか聞きたくないのに、思い通りになんてさせたくないのにどうして最終的に彼の言う通りになってしまうのか。

意気揚々とするヘンゼルとは対照的に、わたしはがっくり肩を落として街へ入った。

女の子たちの黄色い声援や熱烈な視線に混ざる、鋭い視線を一身に浴びながら。

「約束は守る」

そう高らかに宣言した通りヘンゼルは徹底的すぎるほどレディーファーストに徹し、さらにはわたしも含めて周囲がしらせるほどにわたしに対して優しく接してきた。

「転ぶと危ないから」

と言って腰を抱きよせて離そうとせず、八百屋のおじさんと話そうと思えば

「僕以外の男と話しちゃダメ」

と、いちいち会話の間に入ってみたり、花屋の横を通れば

「可愛い人には花が必要だよね！」

と、以前グレゴールが買ってくれたのと同じヒューヴァーの花を買って髪に飾る始末。やめてほしいと言っても約束だからと一蹴される。どうして、加減がわからないんだろう。憂鬱になってくる。だけれど、ここまで徹底して尽くしてもらうと気分も良くて決して彼には見せないけれど内心で笑顔になってしまふ自分がいるのも事実だった。ある程度の範囲であれば。

「そういえば、前もヒューヴァーの花を買って帰ってきたことあったね。この花が好きなの？」

腰に手を回して恋人かと言うくらい近さでヘンゼルが話しかけてくる。うつつ、近すぎるんだけど……離れてくれないかなあ。

「ちょ、ヘンゼル、離して？」

「え、だめだよ。約束したじゃん。これで離して何かあったらどうするの？」

「どうもしないよ」

「いや、僕が僕を責める」

「勝手に責めればいいじゃん」

「つれないよねえ。って話それてるよ！」

「この花？ こないだはグレゴールが買ってくれたんだよ。雰囲気食卓にぴったりだよ。わたしの髪にも似合ってる？」

離すことを了承してくれないことに諦めて本題に戻る。ヒューヴ

アーの花は本当に食卓にぴったりであの日は華やかな夕食になったのを覚えている。

「はあ！？ あれグレゴールが君に贈ったの！？」

思いを馳せていると頭上から随分と不機嫌な声が返ってくる。何か気に障ることも言っただろうか。

「ちょっと、瑚菜。この花の意味知ってるの？ 知ってもらったの？！」

「え？ 意味？ この花に何か特別な意味でもあるの？」

「……。あー。そうだよな。瑚菜が知ってるわけないよね。もー、ほんつとびっくりする！」

それにしても、僕の瑚菜にヒューヴァーの花を贈るとか、グレゴールのやつ。わかってないな。しかも僕より先に贈るとか意味分かんない。あ、でもグレゴールなんか花言葉の知識がある様にも思えないしなー。いやいや、わかって贈ってたらそれでこそ大問題だし。でも絶対わかってるよな。ヒューヴァー贈る意味をわからないってどれだけ世間知らずだって話だしな。

まあ、瑚菜は僕のだから問題ないって言えば問題ないけれど。あーでもなー」

ぶつぶつと不機嫌そうに言い続けるヘンゼルのいろんな部分に突っ込みを入れたい。でも入れないけれど。入れたら最後、粘着質に自分の言っていることが正論だとばかりにわたしを論破するまでひかないことは目に見えている。彼がぶつぶつ言い終えるのを待って改めて話しかける。

「で、この花に何か意味があるの？」

「うん。これは好きな人に贈る花だよ。花言葉は『あなたを思いま

す』って意味なんだよ。好きな人に思いを伝える時に一緒に贈るのが一般的なの」

「ええ！」

能天気言い放ったヘンゼルの言葉にたじろいでしまう。

えっと……それはつまり？

グレーゴールがわたしを？

いつから？

どうして？

あの時、グレゴールがそんなことを思っていたの？

一瞬にして頭の中をいろんなことが駆け巡る。

それに今、ヘンゼルもそういうつもりでこれを？

このよくわからない、女の子には無駄に愛想のいいヘンゼルが？  
黒と言ったかと思ったら三秒後には白と言いだすような彼が！？

子ども顔負けなくらいにわがままなヘンゼルが！？

ええええ！！

ヘンゼルの言葉に慌てて当惑するわたしの頭上でクスクスと笑い声が聞こえてきてはたとその主を睨みつける。またしても彼の罠にかかってしまったということか。彼の言うことは本気にするだけ無駄みたいだ。大きなため息をついてがっくりを肩を落とした。

「今、百面相してたよ。瑚葉っておもしろいね」

睨まれたつもりがあるのかないのか、たぶんないのであるうヘンゼルが笑い続ける。その笑い声が不意に止まる。突然止まった笑い



声に顔を上げて彼を見やる。ヘンゼルは酷くまじめな顔でわたしを見つめていた。

「でもね。僕は戯れで贈ってるわけじゃない。ちゃんと意味をわかって贈ってるんだ」

今度は熱っぽい口ぶりでヘンゼルが言う。だけれど、わたしは無理やりに絡んだ視線を外して遠く離れたところにある時計塔を見つめる。

なんだか腹立たしかった。

さっきまでへらへらと笑っていたかと思えば真面目になったり、優しくしたかと思ったら冷たくしたり、わがままばかり言うくせにわたしの思っていることをわかつていたかのように叶えてくれたりする。わたしばかり彼の言動にうろたえて、掌で踊らされているみたいでまるでおもしろくない。わたしがどんな反応をするかなんて本当はわかってるに違いないんだ。わたしがおろおろしているのを見てほくそ笑んでいるに違いない。全くもって腹立たしい。絶対に真に受けたりしないんだから。

ヘンゼルがフツと笑ったのがわかった。また笑いだしたヘンゼルを置いてすたすと噴水広場に向かう。マーケットでの用事はもう終わったのだ。これから噴水広場にある本屋さんに寄ってヘンゼルの探している古文書とグレゴールの欲しがっていた剣術指南書を探しに行く予定だ。ヘンゼルがいなくなつて済ませられるんだから。ヘンゼルなんて放っておいて本屋に行くことにしよう。

わたしはようやくヘンゼルの腕の拘束から抜けてすたすと歩き出した。

「なに拗ねてんのさ」

にこにここと機嫌のいい声でヘンゼルが後をついてくる。

「こーまーっ！」

一際甘い声で名前を呼ばれて思わず足が雪に取られた。転ぶと感じた瞬間、小さく悲鳴を上げてしまったが、体に受けるはずの衝撃は予想とは違いひどく柔らかい。

「んーもう。うろたえちゃって本当にかわいいなあ」

バランスを崩したわたしを受け止めてくれたのは言うまでもなくヘンゼルだった。わたしを受け止める腕に力が入ったことから、にやけた顔をしているのは間違いないだろうことが顔を見なくてもわかる。

「今日は僕の隣りを歩くことね？」

それにそんなに拗ねないの。拗ねててもかわいいけど、ころころ表情変えて僕のこと見てて？」

「なにそれ」

「そうそう、そういうのね」

「どういうの？」

思わずヘンゼルに食ってかかってしまう。どうせ噛み合うことのない言い合いになって理解不能なヘンゼルの意見にわたしが呆れてしまっただけどころじゃないことなんてわかってるのに。

「困ってたと思ったら睨みつけたり、笑ったり？」

「うー、ヘンゼルってすごく嫌な感じ」

「でも、僕は瑚菜の事すごく好きだよ」

「ああ、そう。ありがと」

「うん。早く瑚菜も僕のこと好きになっただろ？」

はあああ！？

ヘンゼルの言葉に返す言葉もなく呆然と彼を見上げてしまった。につこりと笑ったヘンゼルと目が合って気が遠くなったとしてもそれは仕方のないことだと思う。

その日はお菓子の家に帰るまでヘンゼルに拘束されて甘く優しく接してもらったのは言うまでもない。それがわたしにとって良いことだったかどうかは別として。

全くもって災難でした。

それから追記として、もちろん魔法陣は次の日にはばっちり直っていました。

## 10 禍は西以外からもやってくる（後書き）

ヒューヴァーはおしろい花をイメージしてます。

おしろい花    F o u r   o ' c l o c k （英語）    V i e r    U h  
r（ドイツ語）    四時（日本語）

のドイツ語の部分をなんとなく聞こえたままに。  
っていうか花の名前じゃないし！！  
という突っ込みはなしの方向で。

## 11 甘くはない現実

台所の野菜が保存のきく根菜類がメインとなり季節が厳しい冬を迎えていることを知る。日本で年中季節関係なくいるんな野菜を食べていたことが懐かしく、そしてなんて贅沢なことだったんだろうかとしみじみと感じる毎日を送っている。お菓子の家の周りは相変わらず春の陽気に包まれているから家庭菜園でも始めたらいいのかと思いつく今日この頃だ。ヘンゼルにそれとなく提案してみよう。

はるちゃんは相変わらずグレゴールと一緒に中身を大人にしよう大作戦を決行中だ。詳しくは聞いていないが二人で街に出かけたりもしているようだ。でもどんなことをしているかは教えてくれないさらに驚いたことがある。はるちゃんから部屋を別々にしたいと三日前に言われたのだ。あの時は本当にびっくりした。どうしてか聞くとも早く大人になりたいからと言われた。わたしが大人の姿になることをよくないと思っていることは知っているけれど、やはり大人の姿のままでいたい。以前のように誰かに襲われた時、今なら四歳のままで魔法を駆使して先生を守れると思う。だけれど大人の姿でいた方が力も強いし、剣だって軽々と振るうことができる。誰かを守る為に大人の姿でいることは有益だと力強く言われた。そう言い切った姿は四歳のいつものはるちゃんなのに知らない男を見ているような感覚を覚えた。

そしてふと思う。

はるちゃんのは誕生日がそろそろだと言うことに。ヘンゼルの話ではもうすぐ一年が終わるという。こちらに来たのは年度末の三月。あつという間に半年以上が過ぎていた。

こちらの世界も元の世界と同じように一日は二十四時間。一年という考え方も一カ月、一週間という考え方もだいたい同じだ。だから今は十二月。でもはるちゃんの誕生日って十二月の何日だったか

しら？

これははるちゃんに探りを入れなくては！

思い立ったわたしの行動は速かった。食事の席で話を振る。最近  
は夕食をグレゴールと街でとると言っていない時もあるがちょうど  
今日はおとなしく過ごすことにしたのか、子どもの姿で席について  
いた。

「はるちゃん、誕生日って何日だった？ もうそろそろだよね」

「うん。えっとー、四日後。その日はグレゴールと街で過ごすこと  
にしたから」

「え？」

「一日お泊りで出かけてくるね。でもグレゴールも一緒だから安心  
していいよ」

はるちゃんが穏やかに言うけれど、わたしの内心は穏やかではい  
られない。グレゴールと一緒にだから身の安全は確かだろうけれど、  
泊りでだなんて何をするかわからないじゃない。わたしはキツと鋭  
い視線をグレゴールに送る。グレゴールは一瞬だけ怯んだがすぐに  
何食わぬ顔をして食事を再開した。

「グレゴール！」

わたしの地を這うような怒声に彼は食器を置いて姿勢をただすと  
わたしの方に体を向けた。

「何を心配しているか知らないが、これは春人が決定したことだ。  
春人の決定を尊重してやるべきだろう？」

「そうかもしれないけれど、はるちゃんはわたしが元の世界で保護

者の方たちからお預かりしているのよ。泊りがけで、わたしの離れたところで何かあったらどうするの？」

「大丈夫なんじゃない？」

わたしの訴えをヘンゼルが呑気に遮る。余計なことを言うなとばかりにヘンゼルにも鋭い視線を向けた。

「だって、最近の春人ときたら思うように精霊を遣うになって、魔法の腕ときたら一流だよ。まあ、実戦経験はないからアレかもしれないけど、そこはグレゴールがカバーするだろうし。瑚葉が泊りがけで出かけるって言うのより全然心配じゃないよ」

「どうせ、わたしは何もできないよ！」

「だから瑚葉が出かける時は絶対僕と一緒にね？」

「そういう話じゃないでしょ！」

「こまつせんせ？ ごめんね、お祝いしてくれようとしたんだよね？」

はるちゃんが申し訳なさそうに言う。子どもっぽさだけじゃなくて最近はその中に男を見ることがあって自己嫌悪する自分がいる。

「それもあるけど、そうじゃなくって。はるちゃん……」

あなたは子どもなの？ 大人なの？

はるちゃんを否定しそうになって思わず言葉を飲みこんだ。わたしは保護者じゃない。保育士だ。それが彼を全面的に否定するようなこと言っちゃダメだよ。彼はこの世界で生きていくためにいろんなことを吸収して学んでいるんだから。それをわたしが否定するよなことしちゃダメだよ。

でも、本当に安全？ 身体的に安全ならそれでいいの？

「ああ。わかった。瑚葉は春人が泊りがけで何をするか気に病んでるんだ。やましいことしなければ泊りがけでもいいわけだね？」

悶々と悩むわたしに今度は助け船を出すかのようにヘンゼルが言う。

「なんで誕生日に街に行くわけ？ しかもどうして泊りがけなの？ 納得いく回答じゃなきゃ、君の魔法の師として街行きは認めないよ。誕生日なんて家庭的に祝った方が魔力の伸びも違うんだからさ」

ヘンゼルが珍しく毅然と言う。はるちゃんの師である自覚があったんだなと場違いに思ってしまった。

「そんなわかってる。だから街に行くの！」

「まさか、何それ！ いつの間に!？」

思わず声を荒げたはるちゃんにヘンゼルが目を見張る。二人のやりとりについてどういう意味があるんだろう。

「ボクの唯一がこまつせんせじゃないことなんてとくにわかってるし。だったらボクの唯一を早く見つけなきゃ。それですつと探してた。」

それが最近ようやく見つけたんだ。彼女はボクが四歳児だって知ってて受け入れてくれてるから、誕生日一緒に過ごしたらボクの魔力はもっと伸びるし、いいかなと思って。

ダメかな？

オシシヨウサマ!!」

はるちゃんが不機嫌そうに言う。最後の台詞に至っては棒読みだ。



その姿を見て四歳児にはどうしても思えなかった。大人の方が板に付いてきてしまったのかもしれない。

「そうなんだ」。元の世界に帰るにはもつと必要なわけ？ 魔力が」

ヘンゼルの言葉にわたしもはるちゃんもハツとする。そうだ、はるちゃんは元の世界に帰りたくて魔法を使い始めたんだ。ヘンゼルをも上回る魔力があるのなら元の世界に帰れるんじゃないかと言われて。

「そうだったよ。もちろん。元の世界に帰りたいと思ってた。

でも、ボクの力では元の世界には帰れない。

こまつせんせだったら帰れたかもしれない。でも、ボクじゃ無理なんだ。

元の世界のことを知らなすぎるから」

はるちゃんの言葉にわたしは何も言えなくなる。

「ボクは元の世界のことを本当は何にも知らないんだ。ボクのうちの住所ならわかるよ。すらすら言える。

でも、それだけ。

住所なんて言葉じゃなくってもっと具体的な位置をイメージできないと精霊には伝わらないんだ」

はるちゃんの誕生日の話がどうしてこんなことに？ 誕生日にはケーキを焼いて、いつもより豪華な夕食を準備する。それから、それから……。

人間は許容できない出来事に直面すると、その出来事から逃避しようとすると言うけれど、今がまさにそれだった。

「ちょ、瑚菜、大丈夫？」

呆然とするわたしに気がついたヘンゼルが珍しく席を立ちわたしのもとにやってくる。彼は食事は魔力を回復する大事な場と言って食べきるまで席を立ったり、無駄口を叩くことを嫌うのだ。それが珍しく席を立ったことに瞠目しているわたしはやはりまだ現実に向き合う余裕がないのかもしれない。

「わからないことは何？」

ヘンゼルが優しく頭を撫ぜながらわたしの目を見て問いかけてくる。

「どうして一緒に誕生日できないのかな」

視線を少し下げてわたしは小さく呟く。はるちゃんじゃなくてわたしが四歳児みたいだ。

「魔力を回復したり、魔力を強めるためにいろんな呪いじみたことをしてるのは知ってるだろ？」

いろんな呪いがあるけど、魔法使いにとって一番効果的なことがある。それがソウルメイト 魂の片割れ を見つけること。運よく、魔法使いにはそれが直感的にわかるんだよね。その片割れのそばにいるのがどんな呪いよりも効果的なんだ。特にイベントごとの時にそれを共に迎えるのは大きな意味がある」

「イベント？」

「例えば、満月。新月。それに新年を迎える瞬間。小さな区切りで

言えば、日をまたぐ瞬間だって同じだよ。そして、誕生日。自分が一つ年を取る瞬間。

魔法使いは繊細だから、こういったことの積み重ねで魔力が大きくなったり回復したりするんだよ。

春人は運よくそれを見つけたみたいだね。だから自分の魔力を高めるためにその片割れと一緒に過ごそうとしているんだ」

ヘンゼルは役者めいた大げさな身振り手振りを交えて話を続ける。

「では、なぜ？」

春人には僕よりも大きな、膨大な、魔力があるのに。なぜそれを更に高めなければいけないのか？

元の世界に戻れば魔法なんて使えなくなるのに、本当にその必要があるのか？」

その言葉を引き継いだのははるちゃんだった。しかも、はるちゃんは大人の姿になっていた。

「戻るならすぐに戻れた。

七大精霊の力、火・水・風・土・木・光・闇、この精霊の力があれば時空を超えることが可能なんだ。

それを使える魔法使いが時空を超えて人を呼び寄せる悪戯をすることもボクは突き止めた」

「だけど、春人はいつ、どこの世界に戻ればいいのか精霊にイメージを伝えることができない。春人が知らないから。時空をつなげられないんだ。

仮に座標をうまく定められたとして、少しでも時間を間違えて時空を渡りきつてみなよ。同じ空間に二人の自分がいることになる、それに渡り切ってしまうえば精霊の力も使えなくなる、すごくデリケートなことだ。

なのに春人にはそれに対応できるだけのあちらの知識がない」

「せんせ、覚えてる？　ボクたちがこっちに來た日が何月何日だったのか、何時何分だったのか」

「え……あれは、えっと。三月十六日……？　違うわ、えっと」

「ね？　ボクも思い出せないんだ。これってすごく大事なことなのに。なのに、あいまいな時間軸しか覚えていなくて、別に日にちくらい少し後ならいいのかもしれないけど。数日間行方不明だったことにすればいいし？

でも、ごめんね。

ボクの四歳の知識じゃ時間軸すら細かく設定できる自信がないんだ。それに位置座標なんて特に。

だけど、だからって帰ることを完全に諦めてるわけじゃないから！」

はるちゃんは最後の言葉に思わず力が入ったようでテーブルを両手で叩いた。

「ボクはボクたちをこの世界に連れてきた魔法使いを突き止める。その人からあの日の時間軸と座標を聞き出して元に世界に戻る。

ボクが考え付いた一番確実なあつちに戻る方法だよ。

それをするために魔力はあればある程いい。そういうこと」

言いきつたはるちゃんはおとなしく席に着くと姿を四歳児へと戻した。

「ああ、それはいい着眼点だね。異世界から異世界へと渡ることなんて誰かが介入しない限りあり得ないからね。

それはいい方法なんじゃない」

ヘンゼルも席に戻ると食事を再開する。しばらくは静けさが食卓

を包んだ。気になること、わからないことがたくさんあるのになにがわからないのかもわからないそんな混乱した状態のわたしは何も言いたすことができなかった。

「だいたい目星も付いてるよ。ヘンゼルだって薄々気が付いてるよね？」

唐突にはるちゃんがヘンゼルの方を向くこともなく夕食のシチュ―を食べながらさらっと言い放つ。それに対してヘンゼルは言葉を詰まらせた。

「黙るってことは図星ってとるよ。いいよね？」

容赦のないはるちゃんの追及に本当に四歳児なのかと疑ってしまふ。

「可愛くない子どもになっちゃったね。もういつそ大人の姿でいた方がいいんじゃない？ そんな酸いも甘いも噛み分けたような態度じゃ子どもとして生きていきにくいよ。特に春人たちの元の世界でなんてさ」

「今はそんなこと話してない。問題はボクたちをこっちに呼び寄せた人の話だよ。わかってるんだよね？」

「まあ、ね」

「知ってるのにどうして……！」

「それを聞く？ 僕だって魔法使いのはしくれた。片割れをおずおずと手放すとも思うか？」

「それはヘンゼルのわがままだろ。ボクらには関係ないことじゃないか！ なのに協力する気も見せないなんてフェアじゃない！」

「でも、道標は示したろ？」

「そうだけど。ボクはいいかもしれないけれど、肝心のこまつせん

せは何にも知らないじゃないか」

「知らない方が幸せなこともあるんだよ。それにそれを知ったからって何だって言うのさ」

「何だって言うのだって……！？」

まるで大人の舌戦。いつの間にこんなに大人びてしまったんだろう。つまり、それはグレゴールとの中身を大人にしよう大作戦が大成功だったということなんだろうか。はるちゃんにとって必要なことだったのかな。わたしがしつかりしなきゃいけないのにいろんなことが頭の中をぐるぐると回って何を考えればいいのかもわからなくなってくる。

それまで黙って食事をしていたグレゴールが席を立つ。

「瑚菜、食事を片付けよう。あいつらは放っておいても大丈夫だ。

そうだな、もっとわかりやすく教えてやる。ヘンゼルがお前に教えたくないことも」

静かにわたしのそばに立って、わたしを台所へと促す。ヘンゼルもはるちゃんもその様子を視界の端でとらえているはずなのに何も言うことはなかった。

## 12 過ぎた日

台所に並んで立ち、グレゴールが食器を洗い、わたしがそれを拭いて片付ける。もう半年以上続けてきたことだ。すっかり体に染みついた動作のおかげで隣りに立つグレゴールとぶつかったり、彼の持つ食器とわたしの持つ食器がぶつかるようなこともない。

「ソウルメイトって何？ はるちゃんはどうやってその人を見つけたの？」

食器を拭きながら彼に問いかける。

「ソウルメイトって言うのは、魔法使いや魔女にとってそばにいただけで魔法使いの魔力が回復したり、魔力が増えたりする便利な人間だ」

吐き捨てるかのようにグレゴールが言う。まるでそれを嫌悪しているかのようだ。

「そんな都合のいいことあるの？」

「ある。それがこの世界だ。」

魔法使いや魔女にとつては幸運この上ない。いいこと尽くしだ。しかし、片割れになった方にとつてそれがいいことなんてわからない。言えることは、そうだな。魔法使いがなんとしても身の安全を保障してくれることくらいか。ま、それも魔法使いの都合でだな。そばにいただけでおかしな手順を踏んだ呪いをしなくても魔力が回復したり、増えるんだからそばに置いておきたいに決まっているだろう？」

話をするグレゴールは自嘲気味で、その瞳はまるで何かに耐えるかのようだった。

「グレゴール？」

その瞳のわけが知りたくて声を掛けるが、わたしの声を聞いたグレゴールはそれを瞳の奥深くに隠してしまった。

この世界に來た時からわたしたちをヘンゼルから守ると言う理由で居候を続けている彼だけれど、彼も何か簡単には言えない秘密を隠し持っているのかもしれない。深い森の奥に住むヘンゼルのように。

「それで、春人がソウルメイトをうまく見つけられたのはなぜかって話だったな。

まあ、瑚葉は怒るだろうから言い難いんだが……」

グレゴールが言葉を濁して気まずい沈黙が落ちた。珍しく居心地悪くするグレゴールに鋭い視線を飛ばして先を促す。こんな風に落ち着かない様子の彼は珍しくて少しだけ気持ちが悪くなったのは内緒だ。

「この世界は平和じゃない。だから俺たちのような傭兵がいるし、国には騎士団もある。

……それでな……

春人と一緒にちよくちよく戦いの場に赴いていたんだ」

ガシャン！

グレゴールの発言に思わず拭いていた皿を落として割ってしまう。

「大丈夫か、瑚葉？」



慌ててグレゴールがわたしの指先を見て、割れた皿を片づけ始める。

「あ、ごめん。ありがと。」

戦いに行っていたってどういうこと？」

「つまり、傭兵として戦場に出ていたんだ。二、三日留守にしたこともあつたろ？」

それに春人に一番必要なものは度胸と実戦経験だ。オレがそばにいれば安全だろうし、春人の魔力は半端ないからちよつとのことは問題ないだろうと判断した。まあ、傭兵として赴く戦場は十分吟味して激戦地は避けただけだな」

グレゴールが片付けをしながら話し続ける。そんな危険なことをしていたのに一言も言ってくれないってどういうこと！？

「それで、まあ、戦いの後って言うのは気分が高揚するもんなんだ。それを抑えるためにオレは度々女を抱いたりする」

「はるちゃんにそんなことまで教えたの！？」

それまで黙っていたが思わず声を荒げる。今度は慌てたグレゴールが洗っていた皿を手から滑り落としそうになり慌てていた。なんとかうまくキャッチして事なきを得ていたけれど。

「教えるか！ そんなもん！」

慌てて言うグレゴールを白けたように見やる。

「本当だ。そこまでは教えていない。オレの見ていないところではやっているかもしれないが、教えてはいない。」

ま、春人の整った顔に惹かれる女は少なくないからどこかで手ほ  
どきを受けているかもしれないな」

さっきまで慌てていたくせに意味ありげな視線をわたしに寄こし  
てニヤリと笑ったグレゴールに無性に腹が立った。はるちゃんを幼  
児として接していいんだろうか？

「それとこれとどういう関係があるのよ」

「ああ、つまりだ。

はじめての戦場で、敵とは言え、初めて人を殺した春人は高揚感  
よりも絶望を感じていた。瑚菜から聞くに、元いた世界は平和、人  
を殺めることは大罪なんだろう？ それを己の魔法でいとも簡単に成  
してしまった。

果たして自分は元の世界に戻って生活していいのだろうか？ こ  
の力があればこの世界で生き抜くことが可能ではないか？ 人を殺  
しておいて、罪悪感ではなくこんなことを考える自分はおかしいん  
じゃないか。

それでも戦いに赴いた。全ては己の力を磨き元の世界に瑚菜と共  
に帰るため」

小さな四歳のはるちゃんがそんなことを考えて悩んでいる時、わ  
たしはなにをしていたんだろう。グレゴールの話を聞きながら漠然  
とした不安が胸を襲った。はるちゃんの悩みを気にかけることもな  
く呑気にただ日々を送っていた。はるちゃんが元の世界に帰りた  
いがためにヘンゼルに騙されるように魔法を身につけ始めたことを、  
どう考えていたんだろう。元の世界に帰ることは叶わないと言われ  
て早々に諦めきっていたわたしをはるちゃんはどんな風に見ていた  
のだろう。この世界に来てわたしははるちゃんの何を見ていたんだ  
ろう。

「春人の魔法のおかげでオレたちはいろんな国の戦場に傭兵として赴いていた。そこで出会ったんだ。戦火を逃れて逃げる集団を護衛した時だったな。なんの変哲もないどこにでもいそうな少女だった。はたから見た春人はソウルメイトを見つけたと言うよりは恋に落ちたって言う方がぴったりくる態度だった。事実、春人はその時ソウルメイトという存在を知らなかったから、本当に恋だったんだろうな。」

それで、春人は彼女を森の東の街に呼び寄せて、それまで貯めていた傭兵の報奨金を使って家やら何やらを与えて、今に至るわけさ。詳しいことは春人に聞くといい。

オレはソウルメイトって言うのは、魔法使いにとって道具のように扱うものだと思っていたから春人の傾倒ぶりには驚いているんだ。彼女がソウルメイトだと判明した今でもまるで愛する人に接するような態度だからな。あんな様子で本当に元の世界に戻ることを願っているのか最近ではわからない。

だいたい、瑚葉はどうなんだ？ 元の世界に戻りたいのか。お前、すっかりこっちに適応しているじゃないか。その辺のことを春人と話し合うべきじゃないのか。こちらに来たばかりの頃とは状況が違うだろう？ 春人は自分たちをこの世界に呼んだ者を探しだすって言ってるし、面倒なことになる前にちゃんと話し合った方がいいぞ」

黙って悶々と話を聞いていたわたしはグレゴールの言葉にはつとめる。

今ならどうにかすれば、帰れる状況だ。でもこの世界で大切な人を見つけたはるちゃんをその人と引き裂いてわたしのためだけに帰っているの？

ただされるだけ、取捨選択することなく、選択肢を誰かに選んでもらいそれを受け入れるだけでいいの？  
できることを見逃していいの？

## 12 過ぎた日（後書き）

これが6 / 5現在の最新話です。

### 13 選択するということ

その夜、わたしは意を決してはるちゃんの部屋を訪れた。はるちゃんもわたしが来ることを予期していたのだろっ、特に驚くことなく、青年の姿でわたしを迎え入れた。

「そこ座っていいよ」

はるちゃんが男性らしくわたしに椅子をすすめる。それはこの部屋に唯一ある椅子で、はるちゃんはベッドに腰を下ろした。

「ありがと。グレゴールからいろいろ聞いたよ」

すぐに切り出さないとすっかりと向き合うことができない気がして、わたしは一気に切りだす。

「いろいろってどこまで聞いたの、せんせ」

はるちゃんが苦笑しながら言う。

「戦場に行っていたこととか、はるちゃんに特別な人ができたとか」「うん。そうなんだ。隠していてごめんなさい」

少し頬を染めたはるちゃんが頭を下げる。口調は四歳児のはるちゃんを彷彿とさせるのに行動は大人のそれだった。

「いいよ。先生、こっちに来てから頼りなかったね。何もしてあげられなかったね。そっちの方がごめんね」

わたしも同じように頭を下げる。

「ボクね、本当に帰りたいのかって考えてたんだ。

でもこまつせんせとあつちに帰ろうって言ったこともあったし、約束は守らなきゃいけないと思ってこつちで毎日魔法の勉強とかしてた」

「うん。ありがとう。」

先生はね、こつちに来てすぐにヘンゼルから元の世界には戻れないって聞いていたの。だからそれを鵜呑みにしてしまった。ヘンゼルがはるちゃんに元の世界に戻るって言ったのははるちゃんの魔法の力を開花させたいと思ったから。本当に帰れるなんてヘンゼルは思ってたんだよ。

それなのにはるちゃんは必死で変えるための方法を探してくれていた。それをわたしはもつと真剣に考えなきゃいけなかったのに、何も考えていなかった。ごめんなさい」

今度は深く頭を下げる。頭上ではるちゃんの唸る声が聞こえた。

「たぶん、ヘンゼルはせんせに元の世界に帰ってもらいたくないんだよ。だから最初っから帰れない前提で話をしたんだ。選択肢を巧妙に隠されて、ないものだと思わされたら考えたりしなくなってるだよ。だから悪いのはヘンゼルだよ」

「優しいね、はるちゃん」

「ボク、こまつのせんせのこと大好きなんだよ。保育園でも一番大好きだった。だからこまつせんせの願いなら叶えたかったんだ。

言うておくけど、先生は四歳児だと思って疑わないかもしれないけど、ボク、二十歳の男としてこの世界では結構できる方なんだよ！？ だから頼って？」

「ありがとう、はるちゃん。はるちゃんがあつちに戻らなくてもいいって思ってるなら、それでいいの。わたしたちをこつちに呼んだ

人間を探さなくていいよ。そんな危険冒さなくていい。それに、大切な人と別れて平気なの？ それを奪ってまで、はるちゃんに辛い選択をさせてまで、あっちの帰らなくてもいい。そこまではるちゃんに犠牲を強いたくない」

「先生はそれでいいの？」

そう言っただけ向けるまなざしはまっすぐとゆるぎないもの。わたしの覚悟を問うていた。わたしはゆっくりと、そして力強く頷く。これはわたしの覚悟だったし、四歳のはるちゃんがわたしにしてくれたことへの感謝だった。元の世界に戻るという大きなことをかけたとしても、大切なはるちゃんを選択を後押ししようと思ったのだ。

「わかった」

はるちゃんはそう言うとき大きく息を吐いた。何かに安心したみたいだ。そのままボタンとベットに仰向けに倒れこんだ。その様子にわたしもほっと息をつく。

「せんせー。あのね」

「うん、どうしたの？」

「ボク、こっちにずっといたいって思うくらいこっちが好きだよ」

「うん」

「あっちの世界にはパパやママがいるけど、楽しくなかった。あ！もちろん保育園は好きだったけど」

「ありがと」

「でも、こっちのが好きだ。だってせんせがずっといてくれるし、ヘンゼルもグレゴールも優しくっていつも一緒にいてくれる。」

それにティルアがいるし……」

「ティルア？」

「うん！ ティルア！」

それまで仰向けに倒れこんでいたはるちゃんがピョンと勢いよく飛び上がる。瞳はキラキラと輝いて生き生きしていた。

「ティルアはボクの大事な人。ソウルメイトだけど、それは僕にとつての都合だから、そんなことはどうでもいいんだ。

ティルアのそばにいとくとボク……ほわほわした気持ちになるんだ。チョコレート食べたときみたいな嬉しい気持ちっていうか、うまく言えないけど、こまつせんせも大好きだけど、ティルアのこととはもっと好きっていうか、ティルアは全然違ふところにいるっていうか？わかる、せんせ？」

さも楽しいことのように話すはるちゃんに苦笑が漏れた。

「うん、わかるよ。特別に大好きな人のことを想う気持ち、すごくわかるよ」

「そう！ ティルアは特別なの！」

だから、あつちの世界に戻ることで離ればなれになるの嫌だなんて思ってたんだ。ボクは戻らないってことをどうやってせんせに言ったらいいかってずっと悩んでた」

「そっか。今日話せてよかった。誕生日もその子と一緒にすごしたらしいよ」

「うん。わがままだっけわかってる。せんせはこつちの世界ではママみたいに思ってたから ティルアに出会う前はボクのお嫁さんにするって思ってたけど だから、誕生日お祝いしてもらったって当然なのかもしれないけど、やっぱりティルアのそばにいたいんだ」

とても嬉しそうに笑うはるちゃんに自分の選択は間違っていないだと思えて、わたしも心からはるちゃんに笑顔を向けることができる



た。

「それで、これからどうするかよね」

「え？」

「だってこつちに定住となるとこのままヘンゼルのところに居候しているわけにもいかないし、はるちゃんはわかってるの？ そのテイルアさんと暮らしていくためにお仕事とかしなきゃいけないんだよ？」

「あー、うん。ボクは魔法使いだからどうとでもできるよ。それに傭兵としてもらったお金もあるからしばらくは大丈夫だし。それよりせんせ、ここ出るの？」

「当たり前でしょ？」

「当たり前？ どうして？」

はるちゃんがきょとんとして聞いてくる。

「だって今まで先生ははるちゃんの保護者としての立ち位置だったの。ヘンゼルに住み込みで魔法を教わるはるちゃんのおまけみたいなポジションよね」

「え？」

「でも、定住を決めたらいつまでもそのポジションに甘んじているわけにはいかないわ、はるちゃんにははるちゃんの世界があつて、独り立ちしていくんだから。その時に、わたしがこの世界で途方に暮れたらはるちゃんも後ろ髪ひかれるでしょ？ やっぱり自立しなきゃ。」

そうね、明日にでもヘンゼルに相談するわ」

「ヘンゼルにそんなこと言ったらダメだと思うけど」

はるちゃんが言い難そうに小さな声で言う。どうして？ とばかりにわたしは首を傾げた。

「ボク、怒られるよ」

はるちゃんはがつくりと肩を落として詳しくは話してくれなかった。

ごめんなさいちょっと整理整頓中です。

1→3つてなっていたのを1つにまとめ中です。

なんだか見にくい、かつ気に食わないなと思っていたもので。これって削除はできないんですかね。

ううう、二百文字ってなかなか厳しいものがありますね。

困った！

でもあと八十文字！！

こんなことになるならもっと計画的にやったのに……。

みないでー！！

みないでー！！

ああ、まだあと三十文字。

この直している最中に誰かきたらすごく嫌だな。

でも直したところ全部に一気にお話上げるほど更新早くないんです。

ごめんなさいちょっと整理整頓中です。

1→3つてなっていたのを1つにまとめ中です。

なんだか見にくい、かつ気に食わないなと思っていたもので。これって削除はできないんですかね。

ううう、二百文字ってなかなか厳しいものがありますね。困った！

でもあと八十文字！！

こんなことになるならもっと計画的にやったのに……。

みないでー！！

みないでー！！

ああ、まだあと三十文字。

この直している最中に誰かきたらすごく嫌だな。

でも直したところ全部に一気にお話上げるほど更新早くないんです。

## 16（前書き）

最新話は13話になってます。  
お手数掛けます。

ごめんなさいちょっと整理整頓中です。

1→3つてなっていたのを1つにまとめ中です。

なんだか見にくい、かつ気に食わないなと思っていたもので。これって削除はできないんですかね。

ううう、二百文字ってなかなか厳しいものがありますね。

困った！

でもあと八十文字！！

こんなことになるならもっと計画的にやったのに……。

みないでー！！

みないでー！！

ああ、まだあと三十文字。

この直している最中に誰かきたらすごく嫌だな。

でも直したところ全部に一気にお話上げるほど更新早くないんです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0112s/>

---

おかなしな家

2011年6月7日00時47分発行